4 高校生の友人グループ

高校生の校外生活を正しく理解するためには、友人グループについて知らなければならない。この章では、高校生がどんな友人グループに属し、そのなかでどんなつきあい方をしているか、みてみよう。

高校生は、おとなではないし、子どもでもない。おとなの社会と子どもの社会の境界に位置するマージナル・マン(境界人)である。このどっちつかずの存在にとって、同輩である友人との関係は重要な意味をもつ。不安定な自我を支え、緊張感を和らげてくれる場は、友人との関係において得られる。E・H・エリクソンによれば、同一性を固めることのできない青年は、「自分自身が分裂するのを防ぐために、徒党(友人グループ—筆者注)や群衆の中の英雄に、一時的に同一化する。それも、自分の同一性を完全に失ってしまったかのようにみえるほど過度に同一化する」、「青年は徒党を組むことによって、……互いに助けあおうと努力しているのである」(エリクソン『幼児期と社会Ⅰ』仁科弥生訳　みすず書房)。友人との関係は、青年期にある高校生にとって、自我の安定を保つための重要な基盤なのである。それだけではない。高校生は友人との関係のなかで、さまざまなことを学習する。学校文化や成人文化から半独立の下位文化のなかで、彼らは互いに影響しあいながら、仲間の視線や意向を気にしながら、意識や行動様式を形成していく。友人グループは、教育機能をもった集団なのである。

このような自我の安定化機能と教育機能とをもった高校生の友人グループは、彼らの校外生活の"基地"(ベースキャンプ)である。

そこからの指令をうけて、彼らは出発し、疲れをいやすためにそこにもどる。彼らの校外生活を正しく理解するためには、この基地である友人グループについて知らなければならない。本章では、高校生の友人グループがどんなものなのか、調査結果をもとに分析していく。

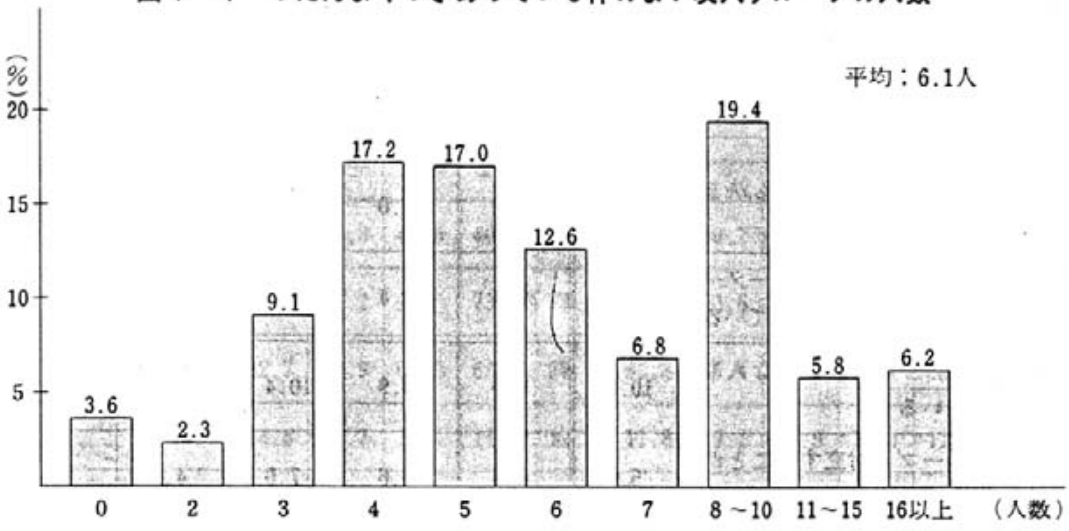
1．友人グループの特徴

平均6.1人がグループの人数。その構成は、同じ学校(77.5%)、同じ学年(94.0%)、同性(89.8%)が圧倒的に多い

「あなたには、ふだんよくつきあっている仲のよい友人グループがありますか」とたずねると、93%が"ある"と答えた。高校生の大部分は、何がしかの友人グループに属している。

そこで次に、グループのメンバー数をたずねた。結果は図4—1である。もっとも多いのは、8～10人のグループ(19.4%)、それに、4人のグループ(17.2%)、5人のグループ17.0%)がつづく。なかには、16人以上という大きなグループも、わずかだが存在する。平均は6.1人。また、男女別に平均をとると、男子——6.2人、女子——6.1人と、ほとんど差がない。学年別にみても、1年——6.0人、2年——6.3人、3年——6.1人と、2年で若干多いが差はほとんどない。性や学年によらず、高校生の友人グループは、だいたい6人ぐらいとみてよい。

図4—1　ふだんよくつきあっている仲のよい友人グループの人数



次に、友人グループが、どのようなメンバーから構成されているかをみていくことにしよう。表4－1は、全体、性別、学年別に、友人グループのメンバー構成の特徴を示したものである。まず全体の特徴からみると、ほとんどのグループが、同じ学校の（77.5%）、同じ学年の(94.0%)、しかも同性の(「異性が含まれている」10.2%）生徒からなることがわかる。クラスやクラブまで同じというものは少ないが、高校生の友人グループは、同じ学校の同じ学年という狭い範囲に限定されているのである。また、メンバーの成績はだいたい同じくらいというものが約4割いる。これは解釈は難しいが注目されてよい数字で

表4－1　友人グループの特徴

（%）

	全体	性別		学年別		
		男子	女子	1年	2年	3年
メンバーは全員同じ学校の生徒	77.5	75.0	79.7	70.1 <	78.8 <	83.1
メンバーは全員同じ学年	94.0	92.9	95.1	96.8	92.6	93.1
メンバーは全員同じクラス	28.2	19.5 <	36.0	38.9 >	21.2	25.1
メンバーには異性が含まれている	10.2	10.5	10.0	9.1	10.0	10.6
メンバーは部やクラブが同じ人が多い	33.0	37.4 >	29.1	32.4 <	38.7 >	28.1
メンバーの成績はだいたい同じ人が多い	42.6	39.1	45.6	46.2	42.9	39.2
メンバーには中学時代からの友人が含まれている	57.6	64.3 >	51.5	68.0 >	55.6 >	49.8
メンバーはだいたいいつも決まっている	83.8	79.2	88.0	83.2	84.3	84.1
グループの中心になる人(リーダー)は、だいたいいつも決まっている	19.2	20.1	18.4	17.1	19.1	20.9
グループの中には、嫌いな人も含まれている	10.0	9.0	10.9	10.4	8.7	10.9
他のグループと対立することがある	5.0	4.5	6.6	7.0	4.6	5.1

注）不等号は、比較的差の大きなもの。（以下同じ）

である。

次に、性別でみると、「全員同じクラス」というのは女子に多く、「部やクラブが同じ」、「中学時代の友人が含まれている」というのは男子に多い。女子のグループはクラスを、男子はクラブを基盤にしているといえよう。

学年による違いは、①学年が上昇するにつれ、「全員同じ学校」の生徒からグループがつくられ、②「中学時代の友人」が含まれなくなる。つまり、友人グループの基盤は、だんだんと学校のなかに限定されてくるのである。また、1年生ではクラスを、2年生ではクラブを基盤とすることが多い。

次に、高校生の友人グループの集団特性をみると、全体として、メンバーはだいたいいつも決まっており(83.8%)、逆にリーダーはいつも決まっていない(80.2%)。また、グループには、嫌いな人は含まれておらず(89.7%)、他のグループと対立することもほとんどない(94.1%)。これらは、性別、学年別にみても、ほとんど変らない。このような結果から、組織されたり統制されたりすることを嫌い、気の合った者だけが、和気アイアイとすごす、穏和で協調的な現代高校生の集団像が浮かんでくる。仲間づくりにおいても高校生は現代青年の諸特徴を反映させているのである。

2. 友人グループでの話題

これまでは、高校生の友人グループについて、主に集団の形式的な特徴についてみた。そこで次に、友人グループのなかみについて、まずは、グループでの話題の点から探っていくことにしよう。仲間の間で、どんなことがよく話題になっているのか。それを探ることにより、友人グループの下位文化の一端を解明しようというのである。

表4－2は、グループでの話題について、全体、性別、学年別、学校グループ別に示したものである。まず、全体をみると、もっともよく話されているのは、「テレビやタレントのこと」(73.8%)である。つづいて「異性のこと」(66.6%)、「勉強や入試のこと」(50.0%)で、これらは半数以上が話題にしている。それに対し、「政治や社会問題のこと」(11.7%)や「文学や哲学のこと」(12.4%)といった、カタイ話はほとんど話題にのぼらない。若者が、

表4－2　友人グループでの話題　(%)

属性 / 話題	全体	性別		学年別			学校グループ別			成績別		
		男子	女子	1年	2年	3年	A	B	C	上	中	下
勉強や入試のこと	50.0	54.1	46.3	43.6	40.2	<64.1	64.4	>50.7	>33.7	61.6	>50.9	>43.0
テレビやタレントのこと	73.8	67.5	<79.2	73.5	73.7	74.0	71.0	70.6	<79.9	73.6	75.1	73.2
異性のこと	66.6	62.7	69.9	65.3	63.7	70.3	65.6	66.4	67.7	59.1	<65.1	<72.8
政治・社会問題のこと	11.7	18.6	> 5.7	9.1	11.2	14.4	17.6	> 9.2	> 7.8	16.4	>11.1	> 9.4
文学・哲学・芸術のこと	12.4	14.5	10.6	9.9	11.6	15.3	18.6	>10.9	> 7.2	14.7	13.0	10.2

注）成績別は自己評価

おとなしくなった、本を読まなくなった、難しい議論をしなくなった、といわれるが、高校生も例外ではない。やむを得ず気にかかる勉強や入試のことのほか、せいぜいブラウン管の世界や異性にしか目が向かない。視野の狭い高校生がここにいる。

次にこれを性別にみると、女子の方が、「テレビやタレントのこと」を、男子の方が、「政治や社会問題についてのこと」をそれぞれよく話題にしていることがわかる。女子の場

合、10人中約8人が、テレビやタレントのことを話すのに、政治や社会問題について話をするのはおよそ20人に1人の割合である。

学年別に顕著な差がみられるのは、「勉強や入試のこと」だけである。3年生でその話題が一番多くなる。やはり、入試が近づくにつれ、勉強や入試が関心事として話題にのぼることが多くなるのであろう。

興味深いのは、学校グループ別にみた話題の違いである。大学進学希望率の高いAグループでは、勉強や入試のことを話題にする者が64.4％いるのに、Cグループではその半分の33.7％である。また、政治や社会問題のこと、文学や哲学のことがよく話題になるのも、進学率の高いAグループである。それに対し、テレビやタレントのことはCグループでよく話題になる。勉強ができ、大学進学への動機づけの強い生徒が集まるAグループの学校では、仲間の間でも勉強や入試のことが日常的な話題となる。ふだんから勉強や入試のことが関心事として定着している。そのようななかで、大学進学への関心もますます強まり、勉強の動機づけもさらに高いものとなる。Aグループの学校では、勉強に価値を置く、勉強志向の下位文化を担う友人グループが数多く存在しており、それが、学校の支配的な風土(School climate)を形づくっているのである。

それに対し、Cグループの学校では、勉強や入試のことを話題にするグループは少ない。かわって、テレビやタレントのことがよく話題となる。マスコミの流布するポップ・カルチャーへの志向が強い、遊び志向の下位文化の友人グループが支配的である。このような学校風土のなかで、Cグループの生徒たちの勉強への動機づけは、ますます低められ、その代償として、即時的欲求充足を促す遊びへの志向がさらに強められる。AグループにもCグループにも、それぞれ、このような循環があると考えられる。

また、学校での成績別に友人グループの話題をみると、表4―2に示されるように、成績上位者ほど勉強や入試のことをよく話題にし、下位の者ほど異性のことをよく話題にする。「同じくらいの成績」の友人とグループをつくる割合は成績上位者47.8％、中位47.1％、下位35.6％と、成績の上位者ほど多くなっている。この結果とあわせると、先に述べた2つの循環は、学校間のみならず学校内にも存在しているとみることができる。つまり、同じ学校内でも、成績上位者は上位者だけで勉強志向の下位文化のグループを形成し、勉強への動機づけを互いに高めあう。それに対し、下位者は勉強には関心をもたず、その代わりにポップ・カルチャーや異性への関心を高める。その結果、勉強への動機づけはさらに低くなる。このように、学校間にも、学校内にも、友人グループを単位とした生徒の下位文化の分化がみられるのである。

3．友人グループでの行動

次に、友人グループの、もう1つのなかみとして、グループで何をやっているのかを、行動の面からみていくことにしよう。

表4－3に示すように、ふだんのつきあいとしては、学校からいっしょに帰ったり（77.3％）、電話で話をしたりすること（60.5％）が多い。また、休日にショッピングしたり街をぶらついたりすること（62.3％）や友人の家に遊びにいくこと（61.4％）もよくある。ところが、旅行やキャンプなど、泊まりがけでいっしょに出かけるグループはあまりない（26.4％）。また、悩みごとの相談やまじめな話をすることもある（74.7％）反面、いっしょに先生の悪口やかげ口をいうこともよくある（78.5％）。学校帰りに先生の悪口をいったり、休日に街をぶらつきながらテレビやタレントの話をしたり、たまには電話や友だちの家で恋の悩みをうちあけあったり、グループでの行動は平均すればこのようなものである。

次にこれを性別でみると、女子は男子にくらべ、電話で話すことや悩みごとの相談をすること、休日に街をぶらついたりすることが多く、男子は泊まりがけで出かけることが多い。

学年別にみると、学年が上昇するにつれ、学校からいっしょに帰ること、悩みごとの相談やまじめな話をすること、泊まりがけで出かけることが増える。学年の上昇とともに、つきあいの年月も長くなり、集団としての成熟

表4－3　友人グループでの行動

（％）

属性／内容	全体	性別			学年別				
		男子		女子	1年		2年		3年
電話で話をすることがよくある	60.5	48.8	<	70.8	53.4		66.8		61.4
旅行やキャンプなど泊まりがけでいっしょに出かけることがある	26.4	35.7	>	18.1	17.4	<	28.7	<	32.2
学校からいっしょに帰ることがよくある	77.3	79.3		75.4	70.1	<	78.1	<	82.7
悩みごとの相談やまじめな話をすることがある	74.7	57.8	<	89.4	69.9	<	75.8	<	77.9
いっしょに先生の悪口やかげ口をいうことがある	78.5	76.7		80.2	74.5		79.3		81.7
※ 休日にいっしょにショッピングしたり街をぶらついたりする	62.3	49.3	<	74.4	61.3		66.7		59.1
※ 休日に友人の家に遊びにいく	61.4	58.6		64.1	62.1		64.5		58.1

注）※は「よくある」＋「時々ある」の合計

がみられるのであろう。それは、「一生つきあえる友人がいる」という回答にも示されている。学年が上昇するほど、友人グループのなかに、一生つきあえる友人がいると答える者が増えるのである(1年——68.6%、2年72.4%、3年——79.9%)。

4．友人グループの機能

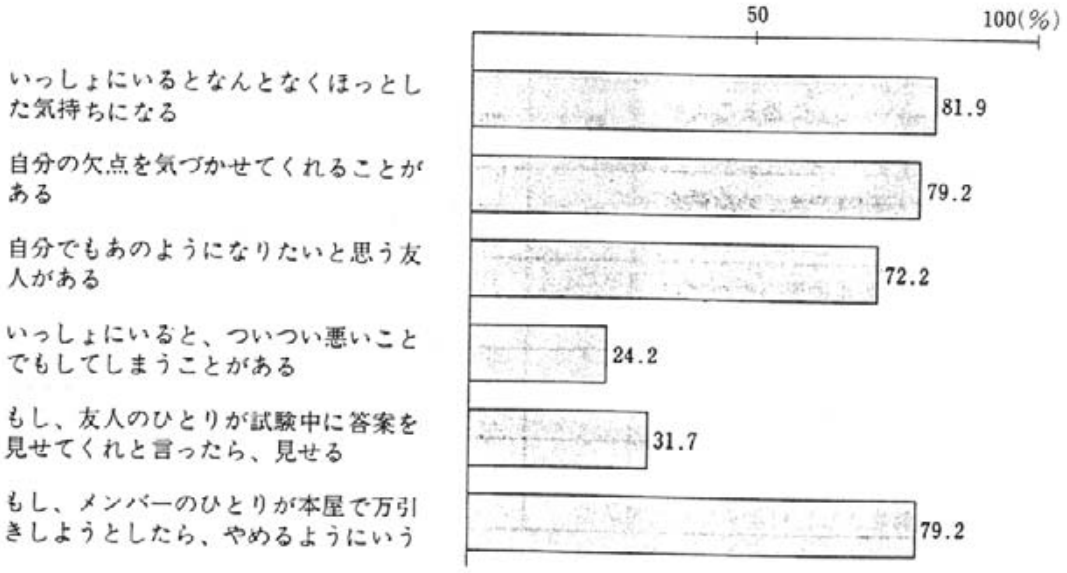
それでは、このような高校生の友人グループは、どのような機能をもっているのだろうか。青年期の仲間集団には、自我の安定化機能と教育機能とがあると本章のはじめに述べたが、データによってこれを確かめてみよう。

はじめに、自我の安定機能。先に表4—3で示したように、友人グループのなかで、悩みごとを相談しあう者は、およそ75%である。この数字は、友人グループが、不安や悩みを解消する重要な機能をもっていることを示している。先生や親には言えない悩みも、仲間にはうちあけられる。さらに、悩みをうちあけあうことは、不安の解消だけにとどまらない。お互いの秘密をもち、それを守り合うことによって集団としての結びつきを強めることもある。そして、そのような集団に身を置くことによって、孤独からも逃れられる。図4—2に示すように、いっしょにいると、なんとなくほっとした気持ちになるという者が8割を越えているのは、友人グループが自我の安定化と緊張の解消に役立っている証拠である。

次に友人グループの教育機能についてみてみよう。まず、自分の欠点を気づかせてくれることがある、と答えた者は全体の約80%におよぶ。友人グループは、自分を映し出す鏡として、教育機能を果たしているのである。それだけではない。自分でもあのようになりたいと思う友人がグループに含まれているという者も、全体の70%を越える。友人グループは、同一化のモデルを提供することによっても、生徒の意識や行動を変えうる教育機能を果たしているのである。

ところが、友人グループはこのように重要

図4—2　友人グループの機能



な機能をもつ反面、むしろマイナスの教育機能をもつ場合もある。全体的には、決して多い数ではないが、24.2%の生徒が、グループでいっしょにいるとついつい悪いことでもしてしまうと答えている。また、仲間のひとりが試験中に答案を見せろといったら、見せてしまうという者も約30%いる。さらに、仲間のひとりが万引きしているところを目撃しても、やめるようにいわない、という者も20%に近い。このように、グループによっては、逸脱行動を抑止することができず、かえってそれを促進してしまうような場合がある。教育の場において、友人グループの機能をうまく働かせるためには、このような友人グループの特徴について、十分理解しておく必要がある。

5．反学校的友人グループ

そこで次に、学校や教師に対抗的な、反学校的友人グループ(anti-school group)をとりだし、その特徴についてみていくことにしよう。

表4－4　反学校的友人グループの規模

(%)

グループを構成する人数 ＼ グループの性格	反学校的友人グループ	その他のグループ
0人	2.6	3.7
2人	0.6	2.7
3人	6.1	10.0
4人	14.6	18.0
5人	13.8	18.0
6人	13.6	12.4
7人	6.1	7.0
8～10人	23.3	18.2
11～15人	6.9	5.4
16人以上	12.3 >	4.5
平均	7.7人 >	6.3人

ここでは、次の質問によって、反学校的友人グループをとりだすことにした。

「メンバーには、先生に反感をもったり、
　さからったりする人が多いですか」

この質問に対し、

「はい」……21.8%
「いいえ」……77.6%

という回答を得た。つまり、今回の調査対象者のうち、約20%が、反学校的友人グループに所属しているとみることができる。

はじめに、このグループが集団としてどのような特徴をもっているのかをみていくことにしよう。まず、メンバーの人数であるが、表4－4に示すように、反学校的友人グループは、それ以外のグループにくらべ、平均して約1.4人ほど人数が多い。最頻値は8～10人であるが、16人以上というグループも1割を越える。それ以外のグループにくらべ集団としての規模が大きいのである。

次にメンバーの構成をみると、表4－5に示されているように、反学校的友人グループの場合、他の学校の生徒や異性をメンバーとして含むことが多い。学校や性を越えた基盤をもっていることがわかる。

そのほか、集団としての特徴として、「他のグループと対立することがある」、「メンバーには自分の嫌いな人も含まれている」という

反学校的友人グループに属する生徒は、約20%で、毎日の生活に不満を感じている生徒に多い。話題で目立つのは、異性のこと

回答が、それ以外の集団のメンバーに比べて多い。反学校的友人グループは集団間においても集団内においても葛藤を生じやすい体質をもつということがわかる。

次に話題である。反学校的友人グループでは、勉強や入試のことはあまり話題にならない。それに対し、もっとも関心を集めているのは異性のことである。これは、それ以外のグループにくらべ著しく高い数値を示している。

行動面ではどうなるだろうか。反学校的友人グループでは、電話で話をしたり、泊まりがけで出かけたりすることが比較的多い。また、いっしょに先生の悪口やかげ口をいい合うことも他のグループにくらべて多い。

次に集団の機能であるが、自我の安定化機能や教育機能については、ほとんど差がない(表4－7)。つまり、反学校的友人グループも他のグループと同様、悩みごとをわかちあったり、いっしょにいるとほっとした気持ちにさせたり、欠点を気づかせたり、同一化のモデルを提供したりという機能をもっているのである。おとなや教師がどうみるかは別として、メンバーにとっては反学校的なグループも、それ以外のグループと同様に、青年期の生徒にとっての重要な機能をはたしているのである。

と同時に、反学校的友人グループは、他のグループにはみられない機能をもつ。それは、逸脱に対する抑止力が弱く、ややもすると逸脱を促す場合さえあるということである。表4－6に示すように、反学校的友人グループではいっしょにいるとついつい悪いことでもしてしまうことが多い。また、仲間からカンニングを要請されれば、断れずに引きうけてしまうし、仲間が万引きしているところを見かけても、だまって見逃すことも多い。このように反学校的友人グループでは、おとなの社会で好ましいとされる社会規範がグループ内で確立されていない。成人文化や学校文化に対する反抗文化(contra-culture)の拠点として、反学校的友人グループは存在しているのである。

それでは、このような反学校的友人グループには、どのようなメンバーが参加しているのだ

表4－5　反学校的友人グループの特徴

(%)

		反学校的友人グループ		その他のグループ
グループの特徴	メンバーは全員同じ学校の生徒	70.3	<	79.6
	メンバーは全員同じ学年	88.5		95.8
	メンバーは全員同じクラス	25.1		29.2
	メンバーには異性が含まれている	19.6	>	7.7
	メンバーは部やクラブの同じ人が多い	28.9		34.2
	メンバーの成績はだいたい同じくらい	41.1		43.1
	メンバーには中学時代からの友人も含む	59.5		57.2
	メンバーはいつも決まっている	87.0		83.2
	グループのリーダーはだいたいいつも決まっている	22.5		18.4
	グループの中には嫌いな人も含まれている	16.8	>	8.1
	他のグループと対立することがある	16.6	>	2.5
よくする話題	勉強や入試のこと	37.7	<	53.5
	テレビやタレントのこと	77.7		72.9
	異性のこと	84.0	>	61.9
	政治や社会問題のこと	13.2		11.2
	文学や哲学・芸術のこと	12.5		12.3
グループでの行動	電話で話をする	69.8	>	58.0
	旅行やキャンプなど、泊まりがけでいっしょに出かける	38.9	>	23.0
	学校からよくいっしょに帰る	78.3		77.1
	悩みごとの相談やまじめな話をすることがある	72.5		75.4
	いっしょに先生の悪口やかげ口をいうことがある	93.7	>	74.5

ろうか。まず生徒の属性別にみたのが表4―7である。性別では、若干男子の方が多いが、学年別にはほとんど差がない。比較的差がみられるのは、学校グループ別および、成績による差異である。反学校的友人グループは、Cグループや、成績下位者に比較的多いのである。

次に、生徒の意識や生活との関連をみる。図4―3に示されているように、毎日が単調でつまらない、いつもなんとなくだるい感じがする、ちょっとしたことで腹立ちを感じる、という生徒ほど、反学校的友人グループのメンバーになりやすい。学校生活を楽しいと感じない者も同様に多い。毎日の生活が充足されずに、不満をうっ積させている生徒たちが、反学校的友人グループを形づくっているのである。そのような意味で、反学校的友人グループは、彼らの不満の解消の場なのかもしれない。たいくつしのぎに、ちょっとイカした男の子や女の子の話をし、それでもつまらない時には"悪いこと"でもやってみる。みんなでやればこわくない。暇つぶしに、ダベって、騒いで、いっしょにいるとなんとなくほっとする。彼らにとって友人グループは、居心地のよい、不満解消の場なのである。

表4―6　反学校的友人グループの機能

(%)

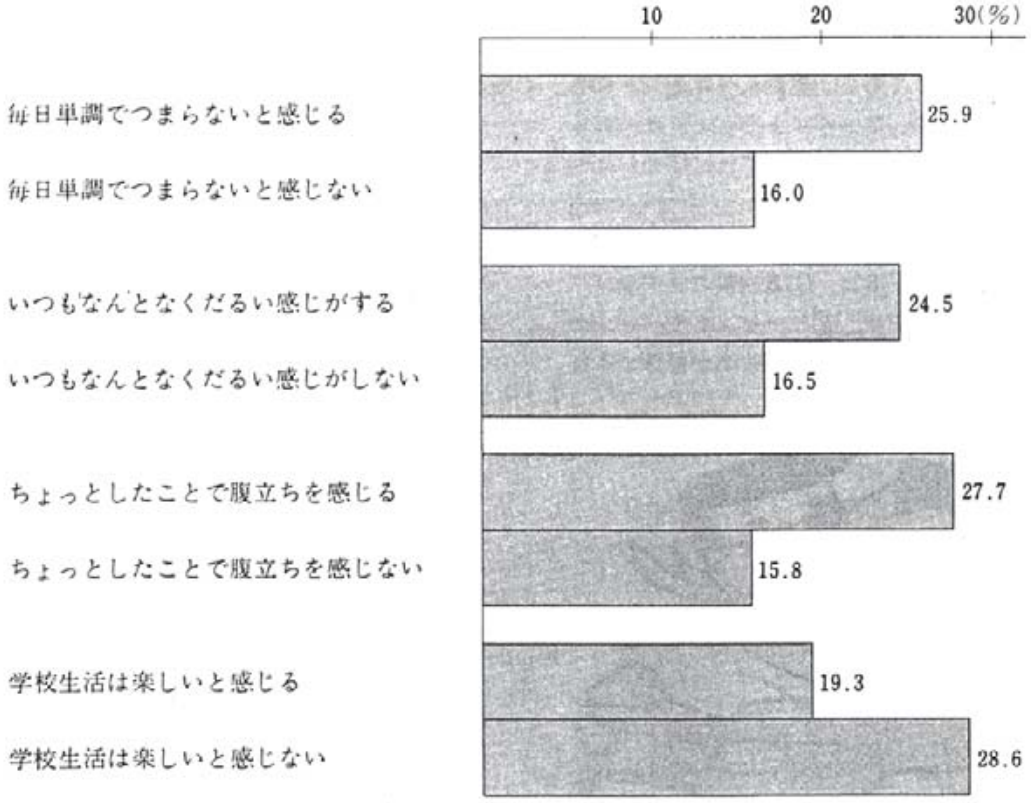
	反学校的友人グループ		その他のグループ
いっしょにいると、なんとなくほっとした気持ちになる	81.8		82.1
自分の欠点を気づかせてくれることがある	78.9		79.4
自分でもあのようになりたいと思う友人がいる	68.2		73.7
いっしょにいると、ついつい悪いことでもしてしまうことがある	47.0	>	17.8
もし、友人のひとりが試験中、答案を見せてくれといったら見せる	52.8	>	25.7
もし、メンバーのひとりが本屋で万引きしようとしたら、やめるようにいう	67.2	<	82.6

表4―7　属性別にみた反学校的友人グループ

(%)

属性	性別		学年別			学校グループ別			成績別		
	男子	女子	1年	2年	3年	A	B	C	上	中	下
反学校的友人グループ	24.5	19.3	20.4	22.7	22.7	19.3	18.6 <	27.8	19.7	18.2 <	26.5

図4－3　生活意識別にみた、反学校的友人グループに入っている生徒の割合



注）図の見方：たとえば毎日単調でつまらないと感じている人の25.9%が反学校的友人グループに入っている。

6．好きなタイプと嫌いなタイプ

最後に、少し角度をかえ、高校生がどんなタイプを好ましいと思っているか、どんなタイプをいやだと思っているかをみていこう。仲間を選ぶ時の基準を、さまざまな高校生のタイプに対する評価から探っていくのである。

調査票のQ11で、「あなたは次のA～eのような高校生にどんな印象をもちますか」とたずねた（巻末の調査票参照）。項目としては、たとえば、「リーゼントやパーマのツッパリスタイルでペチャンコなカバンと紙袋を持っている高校生」「きちんと制服を着て、教科書やノートのいっぱいはいったカバンを持っている高校生」など31のタイプをあげ、それぞれに、「とてもいいと思う」から「たまらなくいやだと思う」までの5段階で答えてもらった。

表4－8は、とてもいいと思うタイプのベスト10と、たまらなくいやだと思うのワースト10をあげたものである。ベスト5は、①運動部の練習にはげんでいる高校生、②体育祭

や文化祭の準備にがんばる高校生、③仲のよい友だちとにぎやかに楽しんでいる高校生、④ユーモアがあり三枚目を演じることができる高校生、⑤アルバイトをして親に小遣いを頼らない高校生である。運動部や体育祭・文化祭などの行事、アルバイトなどに、がんばる高校生と、ユーモアがあって、にぎやかに楽しめるハッピーな高校生とが、「とてもいい」と思われている。

次にワースト5は、①暴走族のアタマ（リーダー）の高校生、②リーゼントやパーマのツッパリ高校生、③文学や哲学が好きで本ば

っかり読んでいる高校生、④本当の友人とただの友人を区別してつきあう高校生、⑤人とつきあうよりひとりでいることが好きな高校生、である。

暴走族やツッパリが嫌われる反面、文学・哲学青年や、友だちづきあいの悪い高校生も敬遠されている。また、6位、7位にあるようなガリ勉タイプや8位、9位のまじめ派高校生も人気がない。さらに注目されてよいのは、「社会的な不正に憤りを感じ、社会問題について議論している高校生」が嫌われる第10位にランクされていることである。

このようにみると、現代の高校生にとって、がんばって、何かに熱中することや、みんなと仲よく楽しめる才能をもつことが、仲間としてむかえられる条件である。ツッパったり、まじめすぎたりすることは、かえって不評をかい、敬遠される。また、自分がシラケていては仲間もシラケる。燃えるところがなければダメである。かといって、文学・哲学や勉強、社会問題などのまじめな世界ではりきるのはよくない。適当に遊べて、エンターテイメントのできる熱中タイプこそ人気がある。現代の高校生にとって、かつての文学青年や政治青年よりも、つきあいのよい、ユーモアのある、それでいて何かに熱中している高校生が、もっとも友だちにしたいタイプなのである。

本章では、高校生の友人グループについて調査の結果をみた。これまでの分析から浮かび上ってくるのは、社会や政治の問題から目をそむけ、身近な入試や異性のこと、テレビやタレントのことなどの私的世界のなかにひたっている6人前後の仲よしグループのイメージである。ツッパリすぎるのも、まじめすぎるのも嫌われる。けんかすることもなく、和気アイアイと冗談をかわしながら、たまには「まじめ」に好きな異性のことを恋の悩みとしてうちあけたりする。学校での話のつづきは、帰り道や電話でする。ときにはいっしょに街をぶらついたり、互いに家を訪ねたりもする。孤独のなかで文学や哲学を通じて"自己"や"人間"と対面するのでもない。同じ学校の同じ学年の同性の同質的な仲間とダベっているほうが寂しさも紛れる。仲間といっしょだとほっとするし、いろいろ教わることも多い。このような仲よしグループのなかで、高校生は青年期の危機を「克服」し、「おとな」になる準備をする。しかし、はたして、このような同質的でぬるま湯のような集団のなかで、危機は本当に克服されるのだろうか。

調査の結果から、こうした疑問を抱かずにはいられなかった。楽しければ、問題を起こさなければいいという論理をすて、今一度、高校生の友人関係について考えてみる必要があるだろう。

表4－8　高校生の好きなタイプ・嫌いなタイプ

順位	ベスト10	(%)	順位	ワースト10	(%)
1	全国大会の出場をめざし、放課後遅くまで運動部の練習にはげむ	57.1	1	暴走族のアタマ(リーダー)をしている	28.3
2	文化祭・体育祭の準備に最後まで残ってがんばる	47.6	2	リーゼントやパーマのツッパリスタイルでペチャンコなカバンと紙袋をもっている	24.2
3	いつも、仲のよい友だちとにぎやかに楽しんでいる	46.1	3	文学や哲学が好きで、暇さえあれば本ばっかり読んでいる	21.9
4	ユーモアがあり、三枚目を演じることができる	42.8	4	本当の友人とただの友人を区別してつきあう	19.9
5	アルバイトをして、親に小遣いを頼らない	33.1	5	人とつきあうよりひとりでいることが好きだ	19.3
6	ロックやフォークのバンドをつくり休みの日にはいつも練習している	27.8	6	電車の中で英単語や歴史の年号をおぼえている	17.7
7	"24時間テレビ"(「愛は地球を救う」)の募金のボランティアをやっている	27.2	7	学校で10番以内の成績をめざしていつもがんばる	13.8
8	無遅刻、無欠席である	26.9	8	きちんと制服を着て教科書やノートのいっぱいはいったカバンをもっている	12.1
9	きまった恋人(ステディ)がある	25.3	9	学校の規則や先生のいうことをきちんと守る	11.3
10	先生になぐられたら、なぐりかえすぐらいの気迫をもっている	24.7	10	社会的な不正(汚職や金権政治)に憤りを感じ、社会問題について議論する	10.8

注）ベスト10の数値は「とてもいいと思う」のパーセント
　　ワースト10の数値は「たまらなくいやだと思う」のパーセント

5 高校生の自我像

この章では、将来の社会的生活を決定するうえで非常に大切な時代＝高校時代における生徒の自我像をみてみよう。

自我像ほどとらえにくいものはない。いわば円柱のようなものである。円柱は真上から見れば円、真横から見れば長方形、そして斜めに切ればだ円形にも見える。これと同じで、自我像もどうみるかによって、その形は大きく異なってくる。人間を扱う学問の場に、人間の行動についての異なる仮定や異なる説明が生まれる原因の1つとして、自我像のとらえ方のこうした違いをあげることができよう。

この章では、高校時代という将来の社会的生活を決定するうえで非常に大切な時代に、生徒がどのような意識で現在の社会的生活を行なおうとしているのか明らかにすることを目的にしている。したがって、ここでは高校生の自我像を社会的行動を主体としての側面から明らかにしていきたい。またさらに、生徒の社会的行動をとらえる視点には、教師対生徒という上下関係のなかでとらえる視点（「モノグラフ・高校生'80」Vol.2では、この視点から自我像を考察している）と、友人集団というヨコ関係のなかでとらえる視点とがある。が、ここでは生徒の校外生活に焦点をあて、校外生活のもつ意味を考えなおすために、友人集団のなかでの社会的行動を規定する生徒の自我像をみていきたい。

さて、われわれは以上のような関心に基づき、生徒に対して次のような質問をした。すなわち、「あなたは、友だちからどんな人間だと思われたいですか」である。生徒にはこちらの用意した26項目におよぶ具体的人間像の1

つ1つについて、「ぜひそう思われたい」から「ぜんぜんそう思われたくない」までの4段階の答のなかから1つを選ぶようになっている。

「友だちからどのような人間だと思われたい」かということは、生徒が友人集団(青年集団)のなかで、自分をどう位置づけたいかという願望を現している。そして、こうした願望は、それぞれの生徒が属するそれぞれの友人集団に特有の意識や行動のパターンを、生徒たちがどのように内在化（自分のものとすること)したいと思っているのか、言い換えればどのようなタイプの人間でありたいのか、またはなりたいのか、を現しているといえよう。

1．友だちからどう思われたいか

まず、生徒が友人からどう思われたいと思っているのか、全体的傾向からみてみよう。表5－1は、「ぜひそう思われたい」、「どちらかというとそう思われたい」と答えた者の割合が多かった項目のベスト9である。①ユーモアがある、①友だちづきあいがよい、⑤頼りがいがある、など友情の技術や友情を大切にすること、すなわち友人関係を大切にしたいとする気持ちが上位に入っている。つづいて、③自分を装ったりしない、④自分のペー

表5－1　自我像(「友人からどんな人間だと思われたいか」、上位9項目)

(%)

① ユーモアがある	86.6
① 友だちづきあいがよい	86.6
③ 自分を装ったりしない(正直だ)	85.3
④ 自分のペースで生きている	82.4
⑤ 頼りがいがある	78.8
⑥ 言うべきことをはっきり言う	77.5
⑦ がんばりやだ	71.3
⑧ 服装のセンスが良い	69.4
⑨ スポーツが得意	68.0

注）：数字は「ぜひそう思われたい」+「どちらかというとそう思われたい」と答えた生徒のパーセント

自分の考えで自分らしく、そして友人を大切にして生きている

スで生きている、⑥言うべきことをはっきり言う、などの自律的・主体的に生きたいとする気持ちがつづいている。現代の高校生は自分勝手であり、しかも主体性がなく周囲に流されているという意見を耳にすることが多い。しかし、この回答で見る限りでは、生徒たちは自分の考えで自分らしく、そして友人を大切に生きていきたいと願っている。とすると、もし高校生が自分勝手で主体性がないということが事実だとしたら、高校生たちの切実な願いを邪魔している「ナニモノカ」を明らかにしていく必要があろう。

2．友だちからどう思われたくないか

反抗的と思われたくもないし、だからといってよい子とも思われたくない

今度は、逆にワースト9をみてみよう（表5－2）。まず目につくのは、⚠ツッパっている、⚠権威や権力に反抗的だ、である。生徒たちは、反抗的だと思われると友人から相手にされなくなると考えているのであろうか。次にこの表からわかるのは、生徒たちが友だちから「よい子」だと思われたくないと思っていることである。⚠先生からほめられる、⚠育ちがよい、⚠将来偉くなる、⚠こつこつ勉強する、などがこれにあたる。反抗的だと思われたくないと同時に、よい子だとも思われたくないわけである。おとなたちは、あるいはこういった点をとらえて、いまの高校生は主体性がない、あるいは周囲に流されている、とみているのかもしれない。

3．自我像の構造

このように、生徒は全体として、自分の考えで自分らしく生き、友だちを大切にしていると思われたく、また、反抗的であるとか、よい子であるとは思われたくないと思っていることが明らかになった。

次に、個々の項目を離れて、因子分析を用いて、生徒の自我像の構造をみてみよう。因子分析法は、生徒が26の質問項目に答えるときに、意識のなかで質問項目をどのように分類しているかを探すものである（詳しくは、3章参照）。

さて、因子分析法の適用の結果、表5—3のような4つの因子が抽出された。簡単な説明をしておくと、次のようになる。

第1因子

成人志向に関する領域：先生からほめられる、校則をきちんと守る、まじめだ、親の言うことを素直にきく、など成人や成人社会に対して適応的であると(友人から)思われたいとする項目で特徴づけられる。

第2因子

友人志向に関する領域：服装のセンスがよい、友だちづきあいがよい、ユーモアがある、など友人や友人集団に適応的だと（友人から）思われたいとする項目で特徴づけられる。

第3因子

自律志向の領域：自分のペースで生きている、言うべきことをはっきり言う、自分を装ったりしない、などの(友人から)自律的であると思われたいとする項目で特徴づけられる。

第4因子

反抗志向の領域：権威や権力に反抗的だ、ツッパっているといった、反抗的であると(友人から)思われたいとする項目で特徴づけられる。

生徒は、ある因子(領域)のある項目につい

表5—2　自我像(「友人からどんな人間だと思われたいか」、下位9項目)

(%)

⚠ つっぱっている	11.4
⚠ 先生からほめられる	23.4
⚠ 権威や権力に反抗的だ	25.0
⚠ 社会問題に関心がある	29.5
⚠ 育ちがよい	34.0
⚠ 将来偉くなる	34.6
⚠ こつこつ勉強する	36.7
⚠ 教科書よりもくわしいことを知っている	37.8
⚠ まじめだ	37.9

注）数字は「ぜひそう思われたい」+「どちらかというとそう思われたい」と答えた生徒のパーセント

表5－3　自我像の構造（因子分析結果）

因子の名称	第1因子 成人志向	第2因子 友人志向	第3因子 自律志向	第4因子 反抗志向
因子を特徴づける変数	先生からほめられる（.789） 校則をきちんと守る（.746） まじめだ（.707） こつこつ勉強する（.659） 親の言うことを素直に聞く（.633） 教科書よりもくわしいことを知っている（.613） 社会問題に関心がある（.609） 成績がよい（.591） そだちがよい（.493）	服装のセンスがよい（.737） 異性に人気がある（.672） 友だちづきあいがよい（.668） ユーモアがある（.599） スポーツが得意（.571）	自分のペースで生きている（.674） 言うべきことをはっきり言う（.635） 自分を装ったりしない（正直だ）（.585） 頼りがいがある（.576）	権威や権力に反抗的だ（.591） つっぱっている（.495）

て「そう思われたい」と答えた場合、同一因子内の他の項目についても「そう思われたい」と答える確率が高い。というのは、同一因子内の各項目は、特定の基準で分類された同じような内容の項目であり、したがって答のパターンもほぼ一定すると考えられるからである。

さて、生徒は、「友人からどのような人間だと思われたいか」という質問を、成人志向の領域、友人志向の領域、自律志向の領域、反抗志向の領域の4つの領域に分類して答えている。このことは、言い換えるならば、生徒たちは自我像を4つの側面に分け、それぞれの側面について、自分はこうありたいと考えていることを意味しよう。

4．生徒の属性と自我像

1年生は、成人・友人・自律・反抗志向のすべてが弱く、特に反抗志向が弱い。2年生は成人志向がもっとも弱く、反抗志向が強い。3年生はすべての志向が強く、特に成人・反抗志向が強い

生徒の属性（学年、性、学校グループなどの生徒の意識や行動に影響を与える社会的要因）別に因子スコアの平均点を求め、生徒の属性と自我像との関係を検討してみよう。

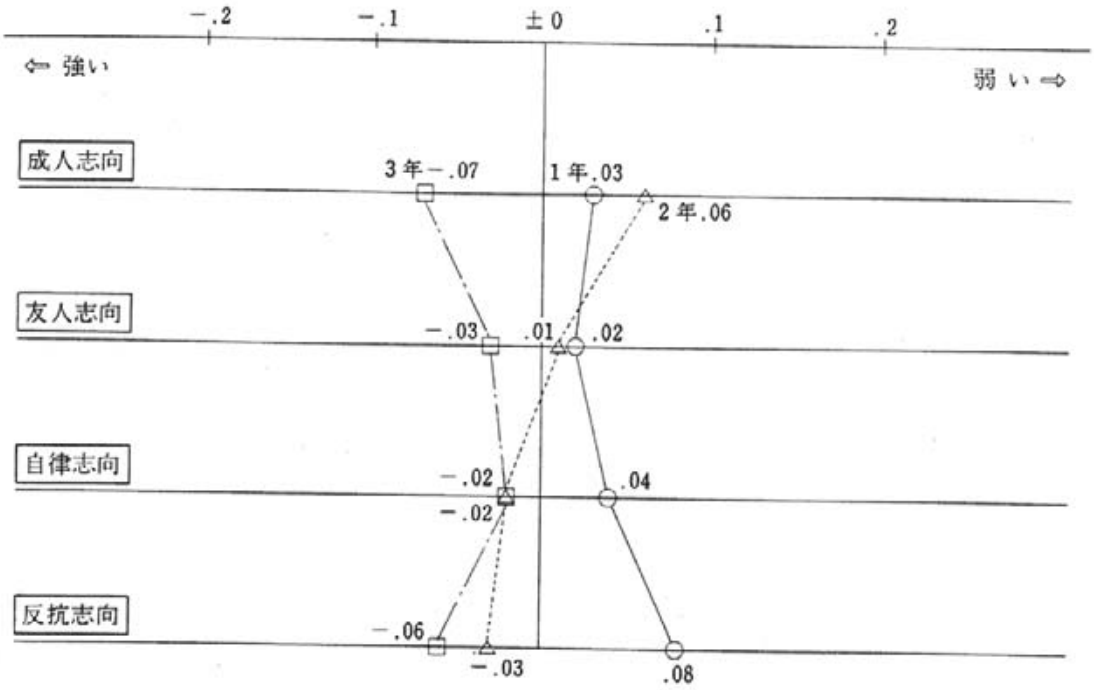
〔学年別比較〕

図5－1は、因子スコアを学年別に比較したものである。この図から、①1年生は、成人志向、友人志向、自律志向、反抗志向のすべてが弱く、特に反抗志向が弱い。②2年生は、成人志向がもっとも弱く、反抗志向が強い。このことは、2年生がいわば、なかだるみの学年であることと関係があろう。③3年生は、1年生の逆で、すべての志向が強く、特に成人志向、反抗志向が強い。成人志向が強いのは、受験や就職が目前に迫っているから、反抗志向が強いのは、反抗の対象から逃げず、向って行こうとするためと思われる。

〔性別比較〕

図5－2は、因子スコアを性別に比較したものである。友人との関係のなかで自我像をとらえたときに、これほど男女間に差異があるとは予想していなかった。男女を比較すると、成人志向と自律志向については、男子の

図5－1　自我像の因子スコアの学年別比較



方が女子よりも高い。しかも同時に、反抗志向についても男子の方が高い。これに対して、女子の方が強いのは、友人志向だけである。

女子生徒はもう少し、成人志向的、自律志向的、かつ反抗志向的でなければならない。なぜならば、いまの日本では、女性の自立にとってそれらは不可欠なもので、もしそれらを欠くならば、あきらめて家に閉じこもるか、それとも見せかけだけの(ファッションとしての)女性の自立にとどまってしまうからである。

また、男子については、もう少し友人志向的であってほしい。なぜならば、友人集団は、成人に対する若者、すなわち社会的弱者の連帯の場であり、個人的な反抗ではなく、集団的な反抗によってはじめて社会を改革していくことが可能になるものだからである。

〔性別×学年グループ別比較〕

今回の調査対象者には多少のかたよりがあるので、学校グループ別にではなく、性別×学校グループ別に因子スコアの平均点の比較を行ないたい。

図5－3は、男子を学校グループ別に比較したものである。この図から、次のようなことがわかる。①入学難易度や大学進学率がもっとも高いAグループの学校の男子生徒は、他のグループの学校の男子よりも、成人志向、自律志向が強い。②Bグループの学校の男子は、友人志向と反抗志向が弱い。かといって、成人志向や自律志向が高いというわけではない。男子生徒のなかで比較する限り、Bグループの学校の生徒は、おとなしく目立たない生徒でありたいとする気持ちが強いといえよう。③入学難易度と大学進学率がもっとも低いCグループの学校では、成人志向と自律志向が弱く、反抗志向が非常に強くなっている。また、友人志向もやや強くなっている。Cグ

図5—2　自我像の因子スコアの性別比較

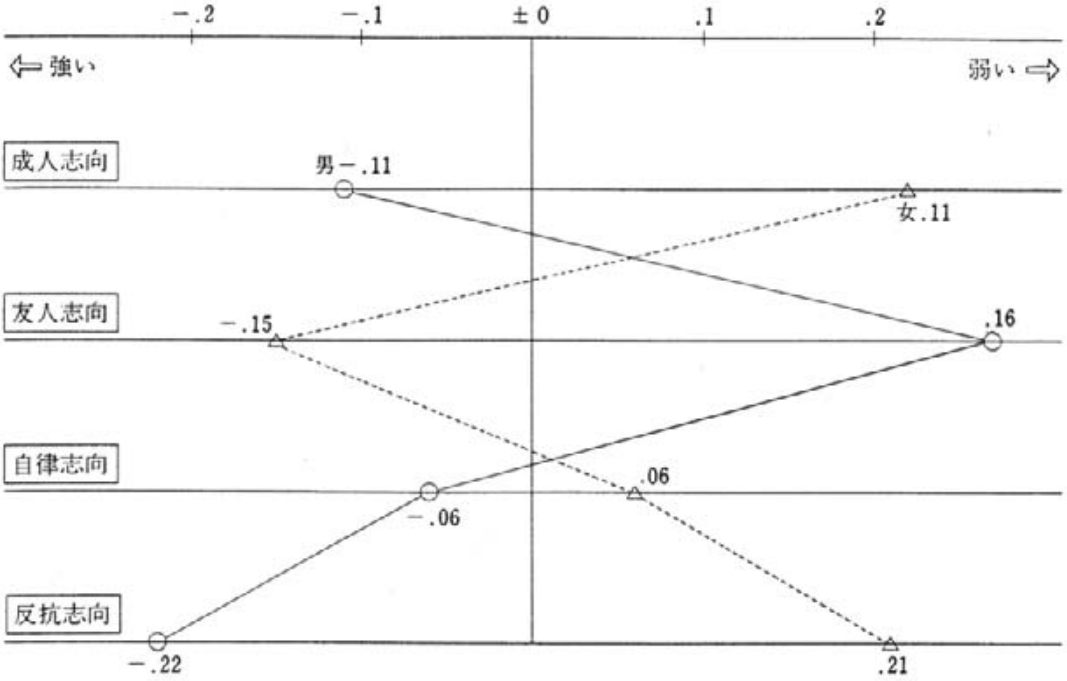


図5—3　自我像の因子スコアの学校グループ別比較(男子)

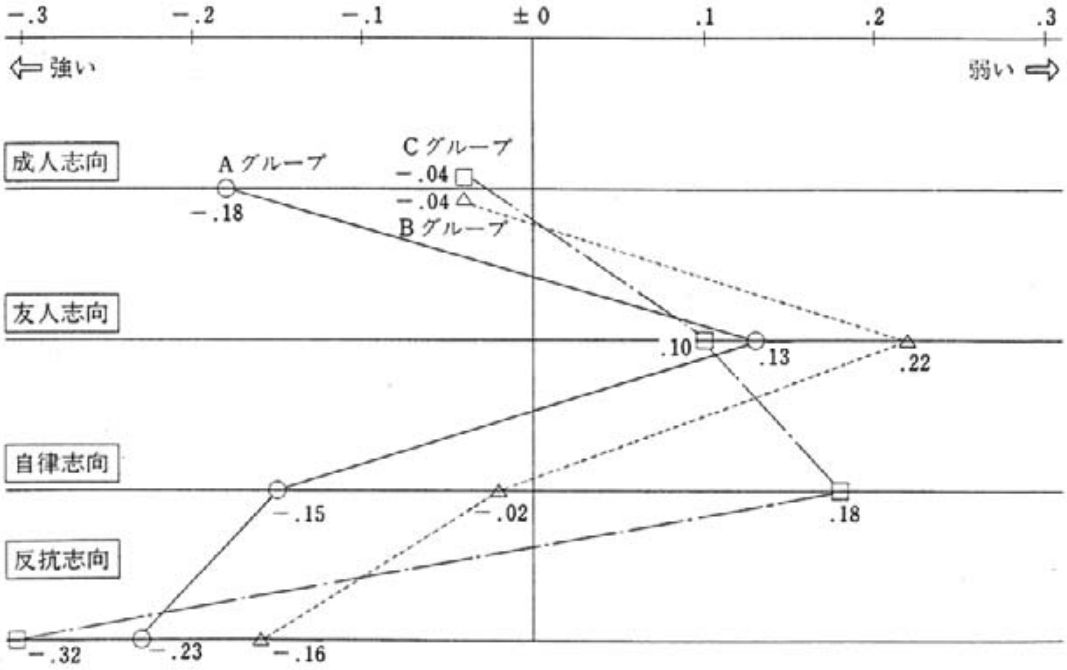
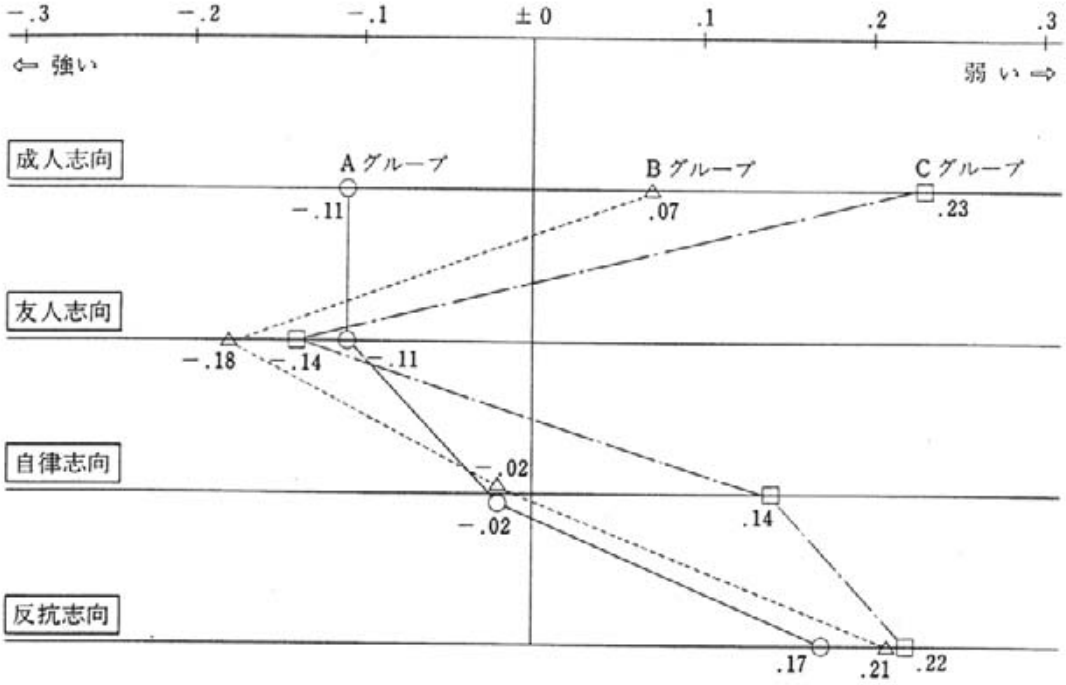


図5－4　自我像の因子スコアの学校グループ別比較(女子)



ループの学校の男子生徒は、自律的であるより前に、反抗的でありたいと考えているわけである。自律的でない反抗とは、単なる反抗に終わりかねないものであろう。

次に、図5－4をみていただきたい。女子の因子スコアの平均点を学校グループ別に示したものである。女子については、グループ間の差異は少なくほぼ同じような傾向をみることができる。しかし、成人志向に関しては、大きな差異がある。Aグループの学校の女子が成人志向が強いのに対して、Bグループの女子は弱く、Cグループの女子は非常に弱くなっている。また、自律志向について、Cグループの女子だけが、弱くなっている。

5．生徒の自我像を変容させるために

生徒の属性と自我像との関連についてみてきたが、ところで生徒の自我像を"好ましい。と思われる方向に変容させるためには、どうしたらよいのであろうか。この問題について

学校のあり方に対する根本的な問い直しからはじめる必要がある

考えてみよう。

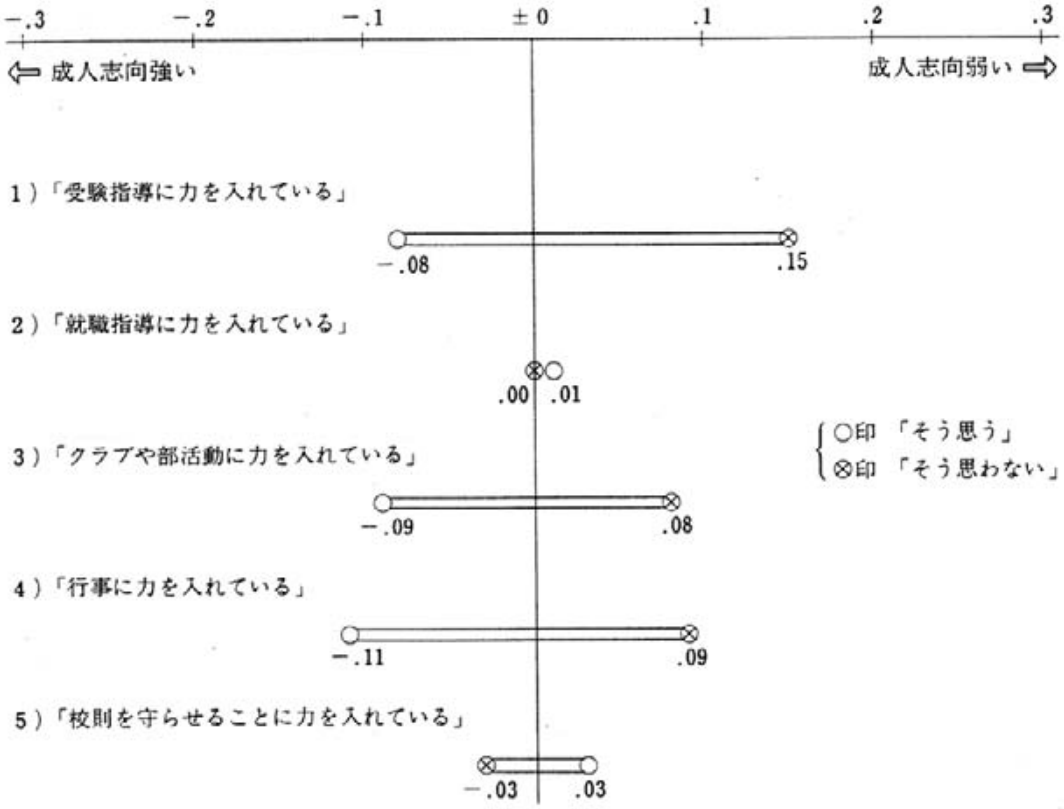
もともと"好ましい"という価値判断は客観性が乏しいもので、誰が誰にとって好ましいと考えるのかという問題をも含んでいる。しかしながら、生徒の属性別のなかで何ヵ所かで部分的に触れてきたように、一般には4つの志向すべてが強く、しかもバランスがとれている状態が好ましいと言えるのではないだろうか。

ここでは、こうした問題意識にたって、生徒の自我像＝どのような人間になりたい（でありたい）かがいかにして変容可能になるか検討してみよう。

〔学校の方針と生徒の自我像〕

まず、学校の教育活動の方針を変えることによって、自我像を変えることが可能かどうか考えてみよう。その方法として、ここでは生徒の学校観別に因子スコアの平均点をみて、生徒の学校観（学校の方針が反映していると

図5－5　成人志向の因子スコアの学校観別比較



考えられる）と自我像の関係をみてみよう。

図5－5は、生徒の学校観別に成人志向の因子スコアの平均を図示したものである。学校が「受験指導に力を入れている」「クラブや部活動に力を入れている」、「行事に力を入れている」と答えた生徒に成人志向が強く、受験指導、クラブ・部活動、行事を充実させることが、生徒の成人志向を強める効果をもつことが予想される。

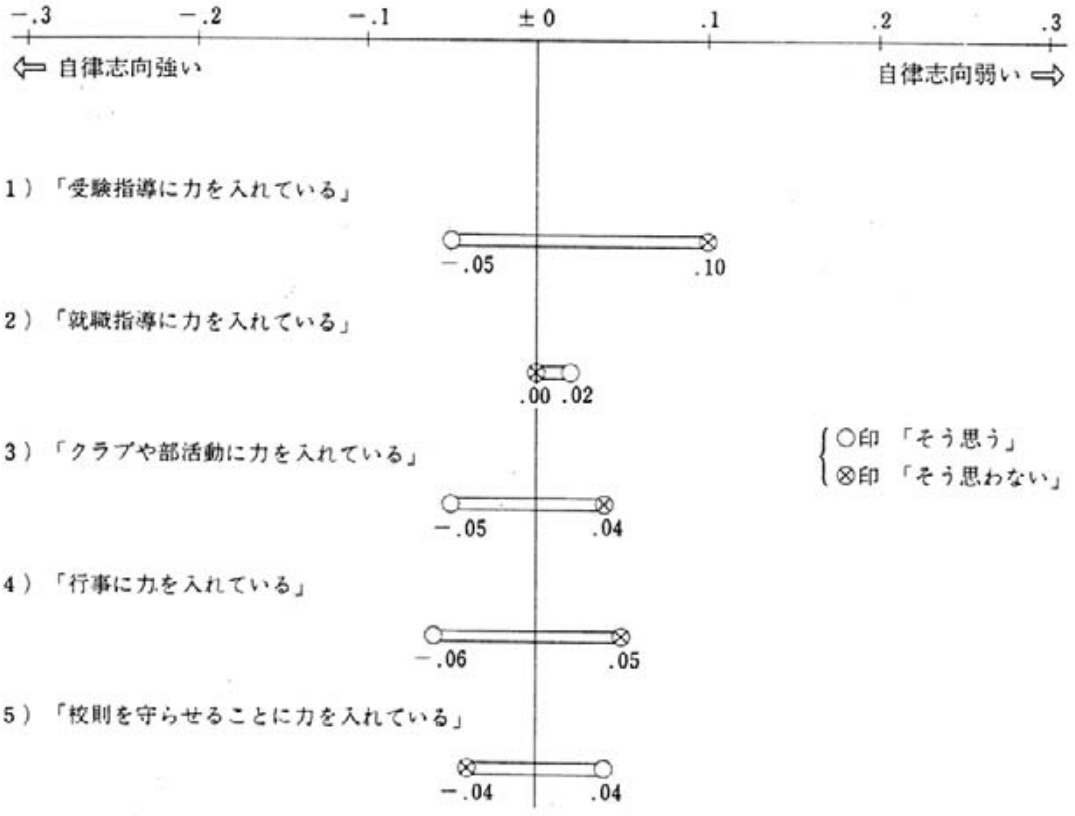
次に、学校観別に自律因子のスコアの平均点をみてみよう（図5－6）。ここでも、学校が、「受験指導に力を入れている」、「クラブや部活動に力を入れている」、「行事に力を入れている」と答えた生徒に自律志向が強く、受験指導、クラブ・部活動、行事の充実が、生徒の自律志向を強める効果をもつことが予想される。しかしながら、「校則を守らせることに力を入れている」と答えた者の自律志向は弱く、規則の過度の強制は控えた方が自律志向を高めるだろうと考えられる。

友人志向と反抗志向については、学校観別の因子スコアの平均点の差異はほとんどみられず、わずかに反抗志向に関して「校則を守らせることに力を入れている」と答えた生徒が反抗志向が弱く、規則の緩和が反抗志向を強めるだろうことを予想させるにとどまっている（因子スコア－0.05対0.04）。

〔学校適応度・友人集団と生徒の自我像〕

学校の教育活動の方針が成人志向と自律志向とに影響を与えることが明らかとなったが、友人志向と反抗志向とに対しては、われわれはどのようにしたら計画的なインパクトを与えることができるのであろうか。また、成人志向、自律志向に対して、もっと効果的な影響を与える方法はないのだろうか。われわれは、この問題に対する答を、生徒の学校適応

図5－6　自律志向の因子スコアの学校観別比較

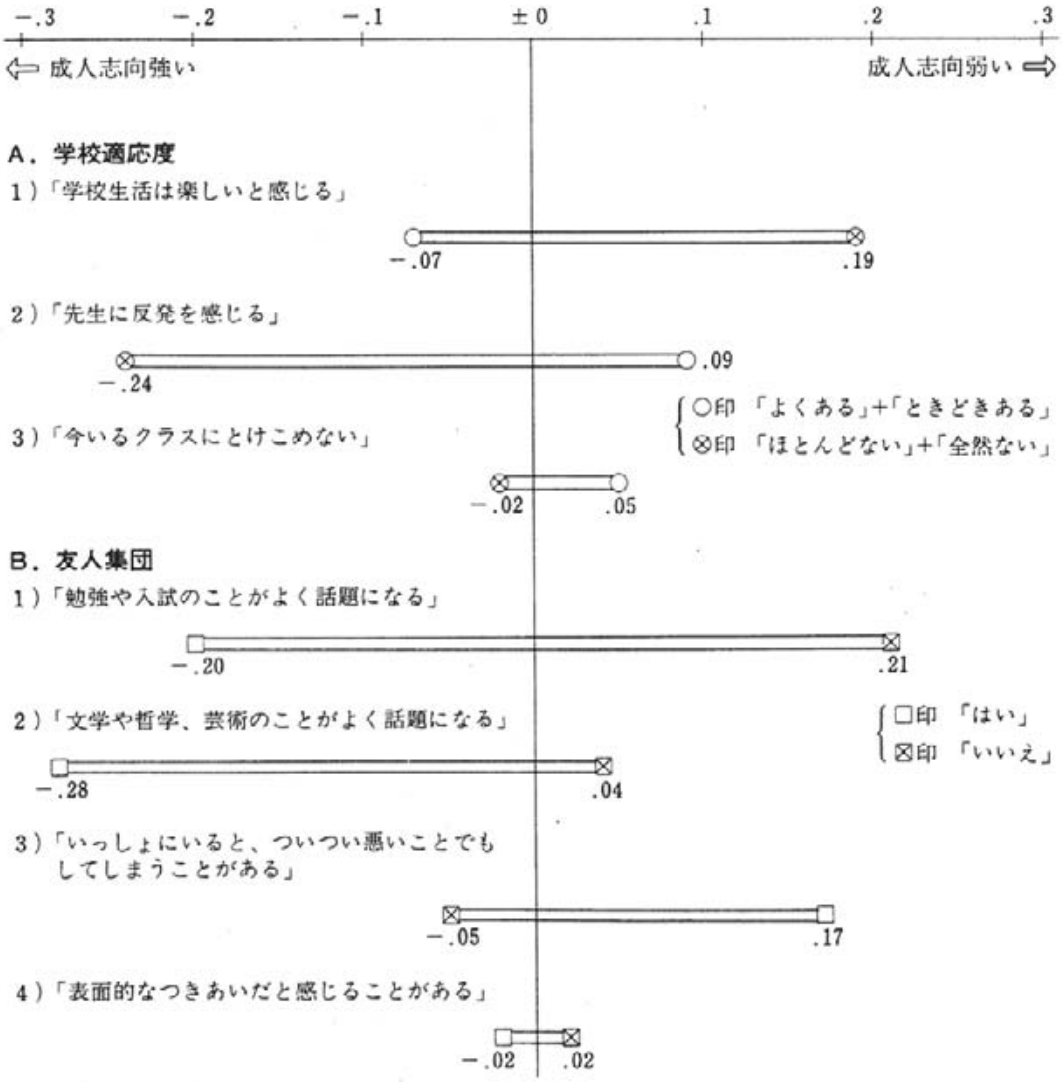


度と友人集団とに求めてみたい。

図5—7は、学校適応度別および友人集団別に成人志向を図示したものである。「学校生活は楽しい」、「先生に反発を感じ」ないと答えた生徒、すなわち学校への適応度の高い生徒は、成人志向が強い。また、どのような友人集団に属しているかというと、「勉強や入試のことがよく話題になる」というアカデミックな友人集団、「文学や哲学、芸術のことがよく話題になる」という芸術・哲学的な友人集団、逆に「いっしょにいると、ついつい悪いことでもしてしまうことがある」とする逸脱的な友人集団への加入が、成人志向に対して強い影響を与えている。アカデミックな友人集団や芸術・哲学的な友人集団に加入している生徒は成人志向が強く、逸脱的仲間集団に加入している生徒は、成人志向が弱い。

学校適応度別、および友人集団別にみた成

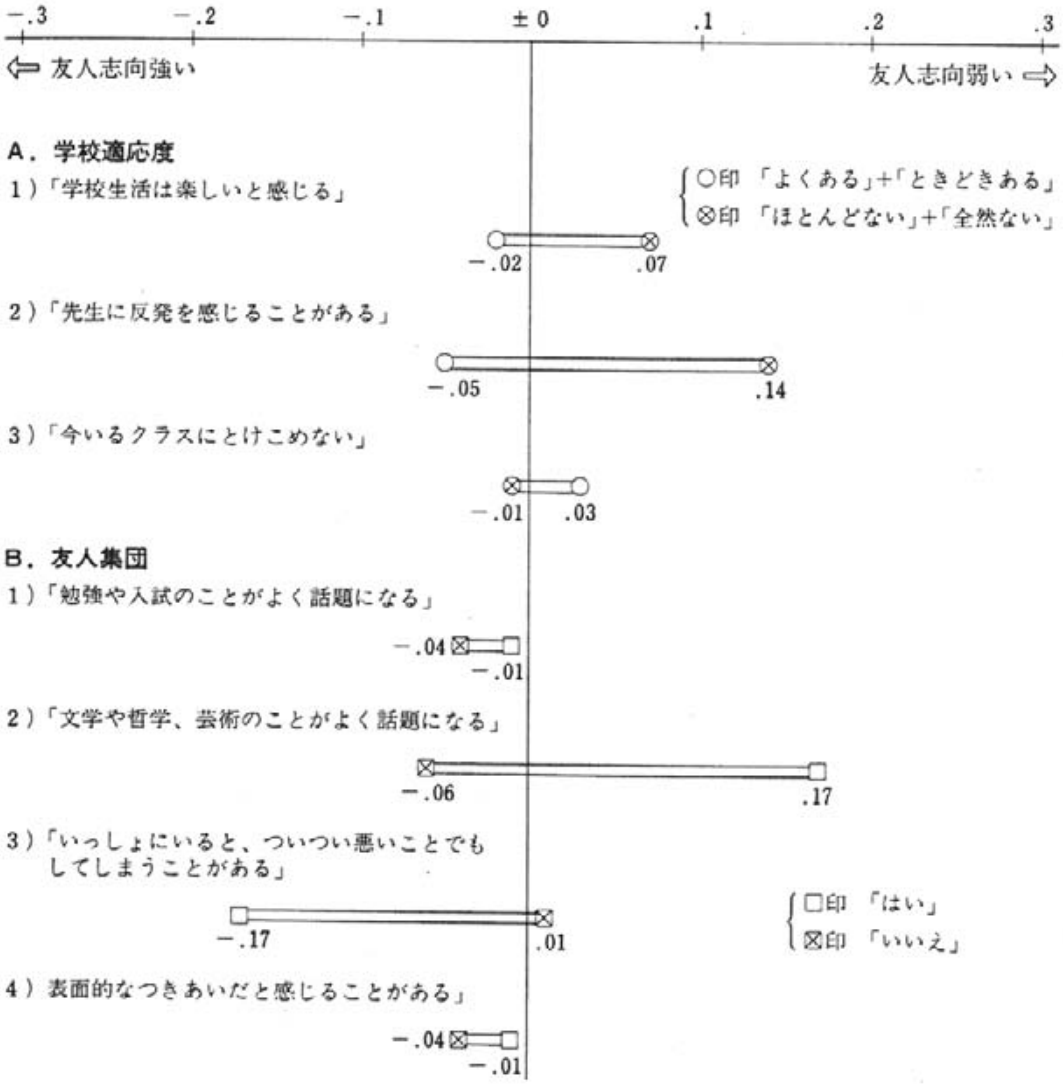
図5—7　成人志向の因子スコアと学校適応度別、友人集団別比較



人志向の程度の差異は、全体に、学校の方針(生徒の学校観)別にみた差異よりも大きい。これは、学校適応度や友人集団は生徒の日々の意識や行動と直接かかわっているのに対して、学校の方針は生徒個人に直接影響をおよぼすというよりは、教師や友人との関係を経てはじめて影響力をもつからであろう。

次に、図5－8で友人志向についてみてみよう。友人志向については、「学校生活は楽しいと感じる」生徒は友人志向的であるが、友人志向的な生徒は、先生に反発を感じる傾向もある。いまの学校制度のもとでは、先生に親しみを感じる生徒は、同時に友人志向的ではありえないのであろうか。教師と生徒の関係が生徒と生徒同士の友人関係と相反するものであるということは、残念なことである。また、友人集団に関しても、芸術・哲学的集団への加入者は、友人志向が弱く、逸脱的集

図5－8　友人志向の因子スコアの学校適応度、友人集団別比較

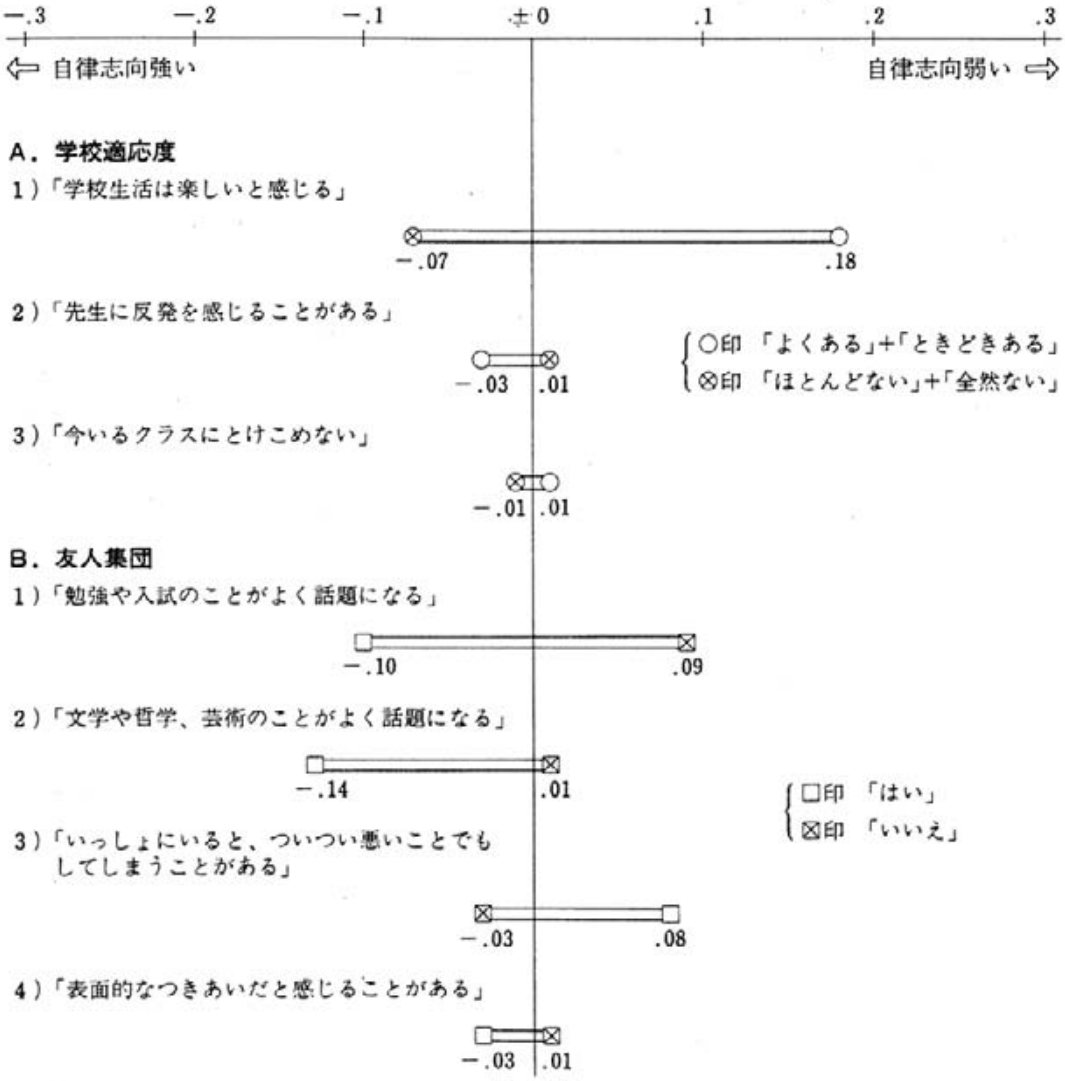


団への加入者は、友人志向が強いという結果になっている。これもまた残念なことである。われわれは、友人志向を強めるために、非芸術・哲学的集団や逸脱的集団を奨励したりはできない。

自律志向については、図5—9にあるように、学校適応度の低い生徒の方が自律的である。また、友人集団については、アカデミックな集団や芸術・哲学的集団に属している生徒は、自律志向が強く、そして逸脱的集団に属している生徒は自律志向が弱くなっている。

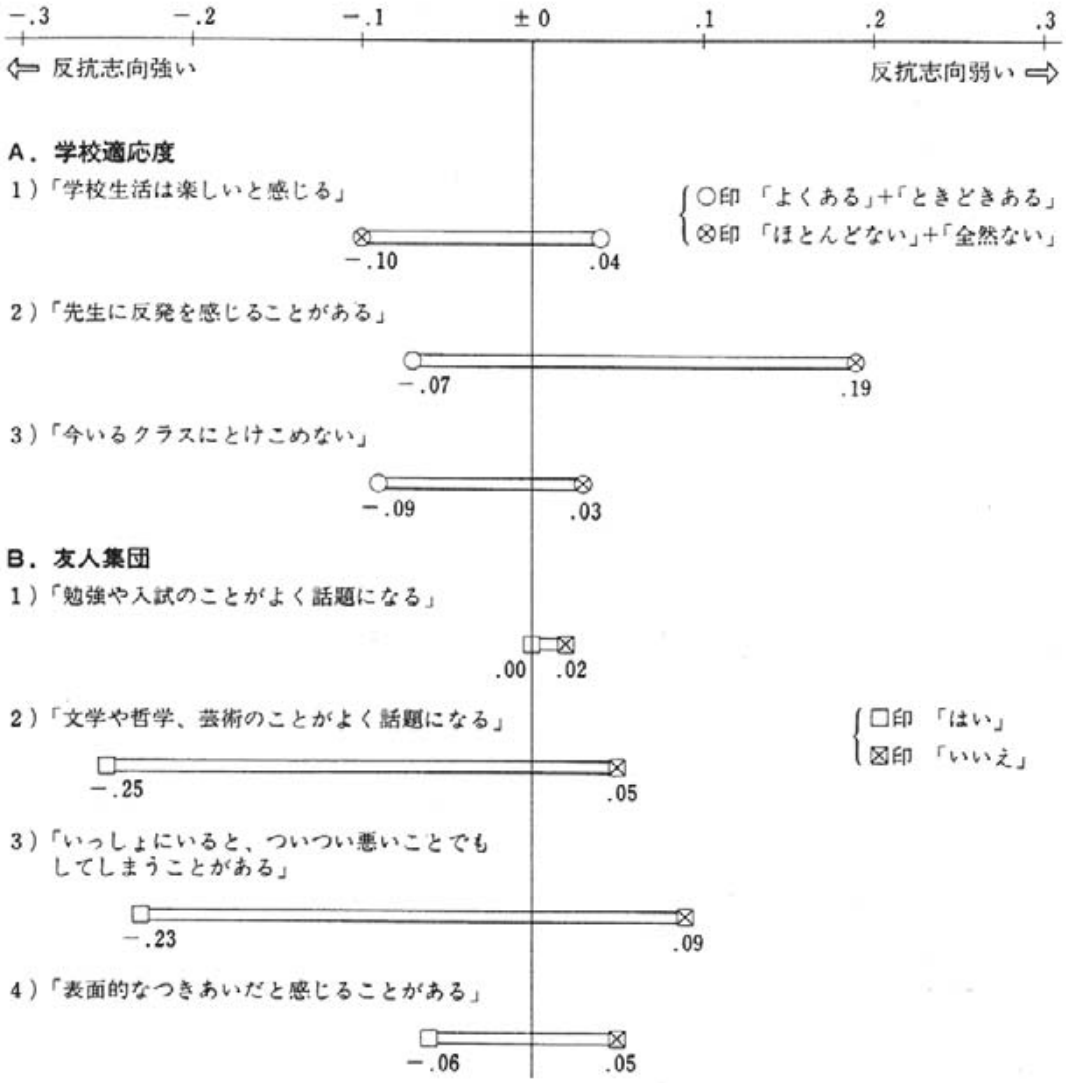
最後に反抗志向についても、図5—10にあるように学校適応度の低い生徒の方が反抗的である。友人集団は、芸術・哲学的友人集団、逸脱的友人集団ともに反抗志向が強くなっている。一見異なる集団が、反抗志向の領域で同じ反応を示したのは、学校のもつ問題点の根が深いことを示しているのかもしれない。

図5—9　自律志向の因子スコアの学校適応度、友人集団別比較



以上、ざっとみてきたところ、学校適応度と友人集団とは、4つの因子＝生徒の自我像の4つの側面と強い連関をもっている。しかしながら、「好ましい自我像」のためには、単に学校への適応度を高めたり、特定の友人集団を奨励するのではだめだということもわかった。それらの対策は、たとえある自我像の領域で好ましい結果を得たとしても、他の領域では好ましくない結果を生むことになるからである。ここは、目先の対策ではなく、学校のあり方に対する根元的な問い直しからはじめる必要があろう。それがなされてはじめて、学校への適応度を高め、特定の友人集団の奨励が好ましい効果をもつことになろう。

図5—10　反抗志向の因子スコアの学校適応度別、友人集団別比較



6 高校生に感動を与えるもの

本章では、現代の高校生がどのような感動体験をしているか、また感動することの意味など、高校生の感動をめぐって考察していく。

人は自分の過去を振り返る時、かつて心打たれたいくつかの感動の体験がよみがえってくる。そしてそれらは自己の人格形成に大きな意味のあったことを知る。感動というのは音楽、絵画、小説といった芸術作品に接する時におこるのみならず、もっと日常生活のなかでのささやかな体験をとおしておこる。人との出会い、ひとつの風景、ひとつの言葉をきいてもおこる。

感動と似たものに熱狂がある。熱狂は外から与えられた感覚的状態に一時的に身を浸すものである。熱狂はそれが去ると、あとに何も残らない。せいぜい残ってもむなしさだけである。それに対し感動はその人の存在の揺らぎそのものであり、生きる世界そのものの基本的で強烈な変容である。感動はなんらかの意味で価値を志向しており、人は外的に存在する価値的なものに接した時、心を動かされる。

感動はひとりひとり感じるものであるが、感動は伝染しやすい。人の涙をみて涙をさそわれる例は多い。特に特定の集団に属すると、同じ感動を共有するという例はきわめて多い。また感動体験の底には、自分の属する集団やそのメンバーからの期待に答えるという役割遂行の意識もはたらいている。したがって、感動体験はその人の社会性を整え、社会への適応をより高める。

現代は、何を見ても聞いても感動しない青年が増えているといわれるが、はたしてそう

であろうか。現代社会は、青年にきわめて多数の感動の機会を与えており、高校生もこういう機会に接することは多い。しかし、感動の機会が増えれば増えるほど、それは水増しされ薄められる可能性が出てくる。感動の質が問題にされねばならないゆえんである。

今回の調査では、現代の高校生が外的に存在するどのような価値に接し感動しているか、そして、そのことの意味を明らかにする。感動体験は、高校生自身のみならず、彼の属する集団によっても異なるであろう。高校生に特定の感動を与えやすい環境とそうでない環境が見分けられれば、今後の教育実践にも役立つであろう。

1. 感動体験の有無

現代高校生の感動体験ベスト3は、
1位テレビ・映画(84.6%)、2位
友人とのつきあい(80.7%)、3位
小説や詩を読んで(68.8%)

1) 全体的傾向

先に述べたように感動は、一時的に燃え上がる熱狂や自分の内部のみにかかわる感激とは違う。感動は外部の価値的なものに接することからくる内部の変革である。そこで質問も「あなたは、次にあげることをとおして、物事の見方や考え方が変わるような感動を受けたことがありますか」とした。そして「小説や詩や評論を読んで」から「お父さんやお母さんの話をきいて」まで14項目について、その有無を尋ねた。

全体でみると、1人平均約7つの分野の感動体験のあることがわかる。平均すると、それぞれの分野で、約半数(48.4%)の生徒が感動していることになる。いまの高校生は感動の機会にめぐまれており、しきりに感動しているといってよいであろう。

まず、全体の感動数を、性別、学年別、学校別にみてみよう。女子(男子6.5、女子7.0)、3年生(1年6.7、2年6.6、3年6.9)、進学率の高いAグループ校(A6.9、B6.7、C6.5)の生徒が、より多くの感動体験をもっているという傾向があらわれている。それらの生徒が、上からの画一的な規制から比較的自由で、感動を受ける余裕があるのであろう。

次に各項目についてみてみよう。

3分の2以上の高校生が感動体験を得ているものは3つある。第1はテレビ・映画という映像メディアで(84.6%)、第2は友人とのつきあ

表6－1　高校生に感動を与えるもの

(%)

順位		全体	性別			学年別			
			男		女	1年		2年	3年
1	テレビや映画をみて	84.6	79.6	<	89.3	82.7		87.6	83.8
2	友人とのつきあいをとおして	80.7	73.9	<	86.9	77.2		81.9	82.6
3	小説や詩や評論を読んで	68.8	66.6		70.7	65.3	<	67.7	< 73.3
4	学校の先生の話をきいて	54.6	56.0		53.3	62.4	>	49.1	52.3
5	クラブ・部活動や学校行事をとおして	53.1	55.1		51.2	53.7		52.7	52.9
6	フォーク・ロック・ニューミュージック・歌謡曲をきいて	51.0	47.7	<	54.0	47.4		52.8	52.6
7	スポーツをしていて	48.9	51.5	>	46.2	50.2		47.2	49.0
8	マンガや劇画を読んで	45.7	34.6	<	56.2	46.2		48.7	42.7
9	お父さんやお母さんの話をきいて	45.4	43.6		47.0	47.6		42.0	46.2
10	異性とのつきあいをとおして	42.4	36.6	<	47.7	40.3		39.3	< 47.0
11	旅行をとおして	40.0	44.4	>	35.9	37.0		37.5	< 44.9
12	学校の授業の内容をとおして	29.8	31.3		28.3	30.9		25.9	32.1
13	クラシックの音楽をきいて	17.7	17.4		18.0	18.9		17.3	16.9
14	絵画や彫刻を鑑賞して	15.2	15.1		15.4	15.7		15.5	14.6
	感動数 (平均)	6.7 (48.4)	6.5 (46.7)		7.0 (50.0)	6.7 (48.2)		6.6 (47.5)	6.9 (49.3)

いというヨコ関係(80.7%)であり、第3は小説や詩や評論を読んでという感動本来のもの(68.8%)である。テレビや友人を通じての感動という手軽な感動を多くの高校生が体験しているのである。テレビと友人を高校生の生活から差し引いたら、あとに残るものはきわめて少なくなるであろう。とはいっても、かつての青年と同じように文学からの感動を得る者も少なくないのである。

次に、3割から5割の高校生が感動を体験しているものとして、先生の話(54.6%)、親の話(45.4%)、授業内容(29.8%)といった教育やしつけによるものがある。第2にクラブ・部活動(53.1%)、スポーツ(48.9%)、旅行(40.0%)、異性とのつきあい(42.4%)といった青年らしい活発な活動から得られる感動がある。第3にフォーク・ロック・歌謡曲をきいて(51.0%) マンガや劇画を読んで(45.7%) という音楽やマンガというメディアからの感動がある。いまの高校生にとって音楽とマンガは欠かせない生活の友である。それらの所持状況からの分析は2章でなされている。

最後に1割台の生徒が感動していることとして、クラシック音楽(17.7%)、絵画や彫刻(15.2%)という昔からのオーソドックスな芸術価値がある。

以上のように、高校生が感動する価値としてテレビから絵画に致るまでさまざまなものがある。多くの高校生に感動を与える価値もあれば、少数の高校生にのみ感動を与えているものもある。昔ながらのものも(文学・芸術)あれば、新しいもの(テレビ・歌謡曲)もある。

2) 属性別傾向

次に、高校生の属性別に、感動体験がどう違ってくるかをみてみよう。まず、性別でみてみよう。女子にくらべ男子に多い感動は、「スポーツ」(男子51.5%、女子46.2%)、「旅行」(男子44.4%、女子35.9%)の2つである。男子の方が身体を動かす活動をとおして感動を得ることが多い。男子にくらべ女子に多い感動は、「テレビ・映画」(女子89.3%、男子79.6%)、「友人とのつきあい」(女子86.9%、男子73.9%)、「フォーク・ロック・歌謡曲」(女子54.0%、男子34.6%)、「マンガ」(女子56.2%、男子34.6%)、「異性とのつきあい」(女子47.7%、男子36.6%)とさまざまな分野にわたり、ずっと多くの感動を体験している。

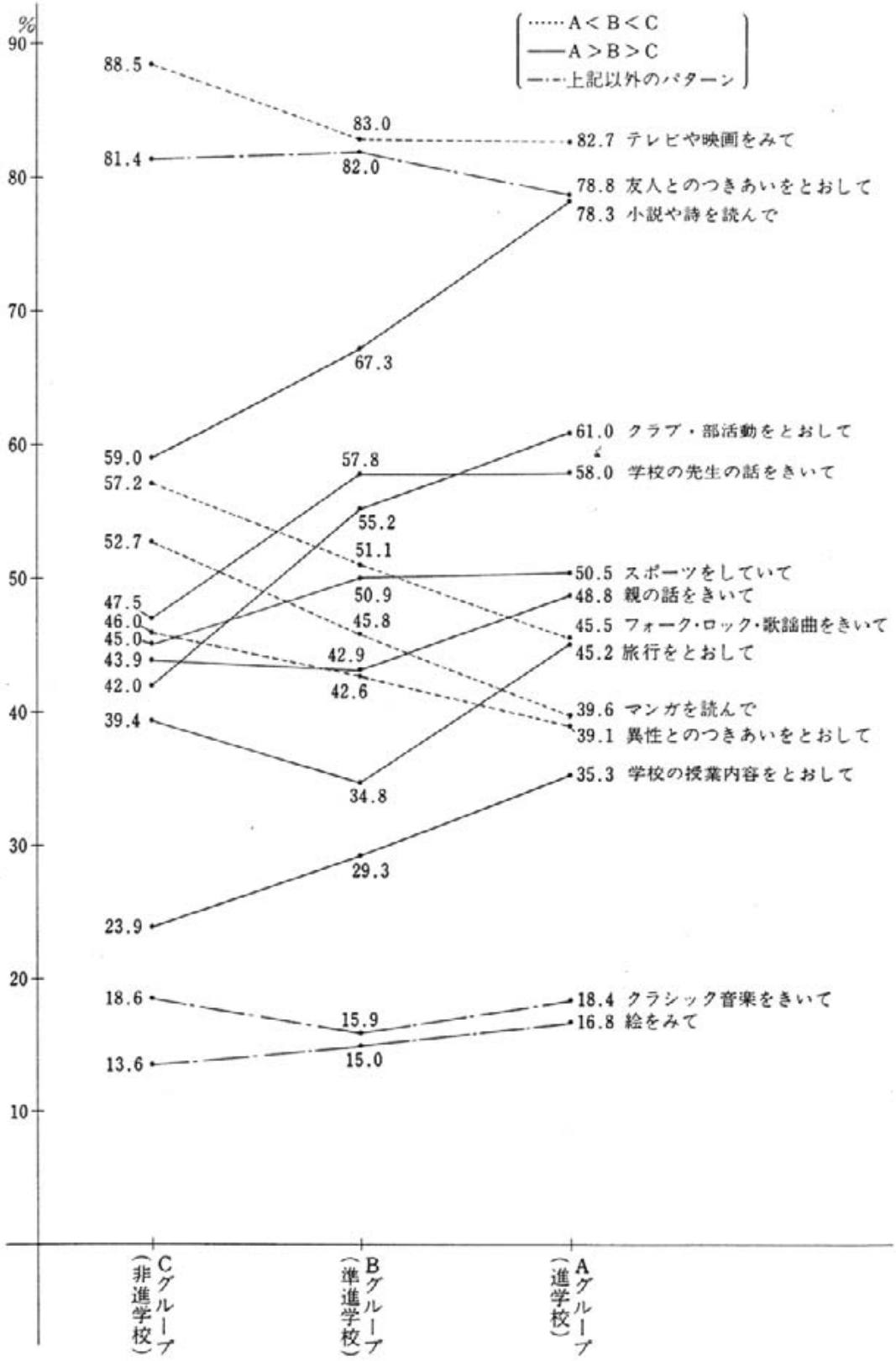
高校生の段階でみる限り、男子より女子の方が感動体験にはめぐまれており、生き生きとしている。男子には将来の経済的自立に向けての禁欲が強いられ、いつまでも好きな楽しみごとを追い求めてばかりいられないのに対し、女子は比較的そのような重圧から解放されている。女子は、テレビ、映画、マンガ、友人、異性とのつきあい、音楽と、将来を心配することなく、それ自体を楽しみ感動を受けることが多い。

次に、学年別にみてみよう。1年生で「先生の話をきいて」が多く(1年62.4%、2年49.1%、3年52.3%)、3年生で「異性とのつきあいをとおして」(1年40.3%、2年39.3%、3年47.0%)が多い。また学年とともに「小説や詩や評論を読んで」が増える(1年65.3%、2年67.7%、3年73.3%)。やはり学年とともに、既知より未知の分野での感動が増えるようになるのである。

学校グループ別に感動体験の差をみたのが図6—1である。先に述べたように、感動は伝染しやすく、同じ集団に属すると同じ感動を共有することが多い。大学進学率が高く、進学や勉強の価値風土が支配的なAグループの学校の生徒は、「学校の先生の話をきいて」(A58.0%、B57.8%、C47.5%)、「学校の授業内容をとおして」(A35.3%、B29.3%、C23.9%)、感動することが多く、さらに「クラブ・部活動をとおして」(A61.0%、B55.2%、C42.0%)、「小説や詩を読んで」(A78.3%、B67.3%、C59.0%)と友人関係を媒介にして伝達されるアカデミックな内容にも感動体験を得ている。

それに対し、大学進学率の低いCグループの学校においては、「テレビや映画をみて」(C88.5%、B83.0%、A82.7%)、「フォーク、

図6－1　高校生の感動体験（学校グループ別）



ロック、歌謡曲をきいて」(C57.2%、B51.1%、A45.5%)、「マンガを読んで」(C52.7%、B45.8%、A39.6%)、「異性とのつきあいをとおして」(C46.0%、B42.6%、A39.1%)といった、学校外のマスメディアや消費文化に接して感動を覚えることが多い。Cグループ校の生徒は、学校内で感動の対象に出会うことなく、学校外にその対象を求めて、多様なメディアと出会うのである。学校外のメディアがはたして十分な教育的意味をもちうるかという心配も一方にあるが、学校外のメディアが高校生に感動を与え、彼らの社会性の発達、人間形成に役立っているという解釈も成り立つであろう。この点に関して、大学生にコメントを求めると次のような答が返ってきた。

「Cグループ校の生徒には、学校教育への反抗心が感じられる。ちょっと不健康で逃避的だと思う」、「Cグループ校の生徒が、毎日を何もなくすごすよりずっといいことだし、悪いことだとも思わない。ただそれらの感動は一時的なことだと思う」、「Cグループ校の生徒は、学校内の授業や進学にばかり気をとられずに、広く世のなかをみており、いろいろなものに興味をもっているといえそうだ」、「Cが普通であって、日常生活において身近なものに対する感動がAは少なすぎる」、「Aグループ校の生徒の感動条件はあまりに学校の内容に固執しすぎている。これでは人間としての成長が望めないし、小さな人間ができあがる」(武蔵大学生1～4年)。以上のように大学生にはCグループ校の生徒の感動体験に肯定的な評価が多い。

2. 感動の構造

大学進学率の高いAグループ校の生徒は、勉強と芸術の分野での感動体験が多く、進学率の低いCグループ校の生徒は、校外のマスメディアによる感動体験が多い

以上みてきたように、高校生の感動の量は、高校生の属性や集団によって、多少の差があり、感動の質に関しては、性差、学年差、学校グループ差が存在する。この感動の質の差違に関してさらに明らかにするために、感動の13項目に関して、因子分析を施した。因子分析は3章、5章でも試みたように、回答の傾向から互いに連関の高い質問同士をグループにまとめ、いくつかの質的に異なるグループ(因子)を抽出する方法である。因子分析を適用の結果、表6－2のように、高校生に感動を与える価値は4つの因子からなることがわかった。

第1の因子は、「学校の先生の話をきいて」、「学校の授業内容をとおして」、「親の話をきいて」感動を受けるものである。崇高なもの価値あるものとしておとなから教えられたことを素直に受け入れる感動のタイプである。「勉強」因子と名づける。

第2の因子は、「スポーツをしていて」、「クラブ・部活動をとおして」、「友人とのつきあい

表6—2　感動要因の構造

因子の名称	第1因子 勉強	第2因子 スポーツ	第3因子 マスメディア	第4因子 芸術
因子を特徴づける変数	学校の先生の話をきいて (0.715)	スポーツをしていて (0.562)	テレビ・映画をみて (0.555)	絵画や彫刻を鑑賞して (0.612)
	学校の授業内容をとおして (0.567)	クラブ・部活動をとおして (0.548)	マンガ・劇画を読んで (0.433)	クラシック音楽をきいて (0.521)
	親の話をきいて (0.457)	友人とのつきあいをとおして (0.402)	フォーク・ロック・歌謡曲をきいて (0.384)	

をとおして」得られる感動体験である。「スポーツ」因子と名づける。

第3の因子は、「テレビや映画をみて」、「マンがや劇画を読んで」、「フォーク・ロック・歌謡曲をきいて」の感動で、マスメディアをとおして送られてくる映像や、音声に反応して感動する体験である。比較的受身で、消費的で孤独な感動体験である。休息を求めている時、ストレスのたまっている時に救いとなる感動体験であるが、いつまでもこの感動体験に鎮座していると、その居心地のよさに活力を失い、意欲も社会性も失っていく危険性をはらんでいる。「マスメディア」因子と名づける。

第4の因子は、「絵画や彫刻を鑑賞して」、「クラシックの音楽をきいて」で、孤独であるが、きわめて理知的で、深い心からの感動の得られる体験である。この体験が得られるためには、すばらしい絵画や音楽に出会うと同時に、こちらにそれを鑑賞する能力のあることが条件となり、きわめて高度な感動体験である。「芸術」因子と名づける。

3．感動の規定要因

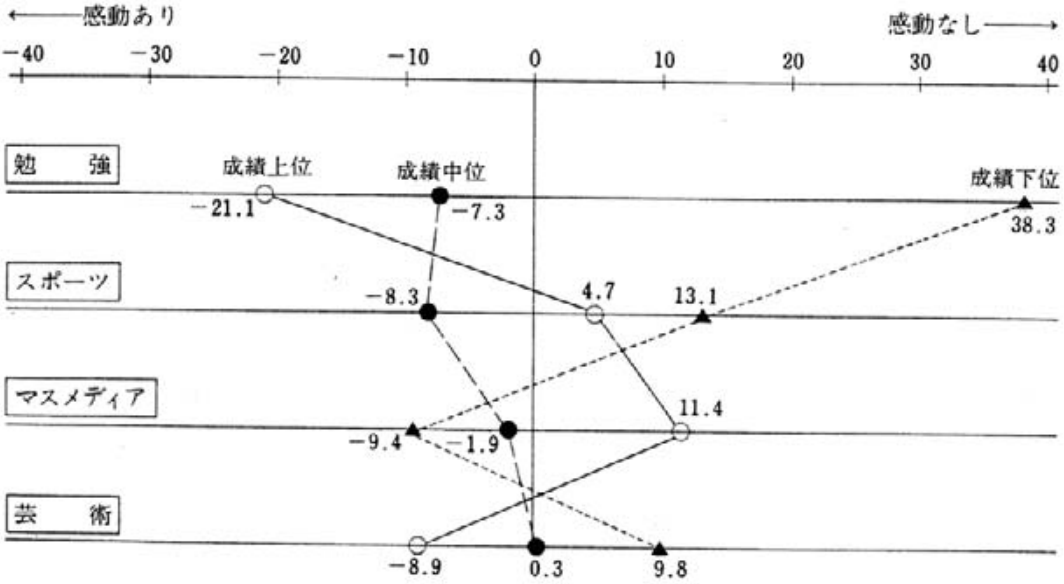
高校生の受ける感動の質が、高校生の属性や集団によってどのように違ってくるかということを、以上の因子分析の結果を使って明らかにしてみよう。表6—3は、性別、学年

表６－３　感動の因子スコア・性・学年・部活動別（×10^{-2}）

（マイナス方向：感動あり）

因子の名称		第１因子 勉強	第２因子 スポーツ	第３因子 マスメディア	第４因子 芸術
性別	男子	−2.6	0.0	17.5	−2.3
	女子	2.5	0.3	−16.4	1.9
学年別	１年	−9.4	3.3	0.0	−0.5
	２年	9.2	1.8	3.8	0.2
	３年	0.6	−4.3	0.6	0.2
部活動別	運動部熱心	−9.4	−24.3	6.2	4.3
	文化部熱心	−11.1	7.4	−1.7	−17.2
	以前参加	0.6	−0.7	0.1	1.0
	参加したことがない	16.5	28.7	−6.8	0.2

図６－２感動の因子スコア・成績別（×10^{-2}）



別、部活動別にそれぞれの因子得点を示したものである（マイナス得点の高いほどその因子の感動があり、プラス得点が高いほど感動がない）。

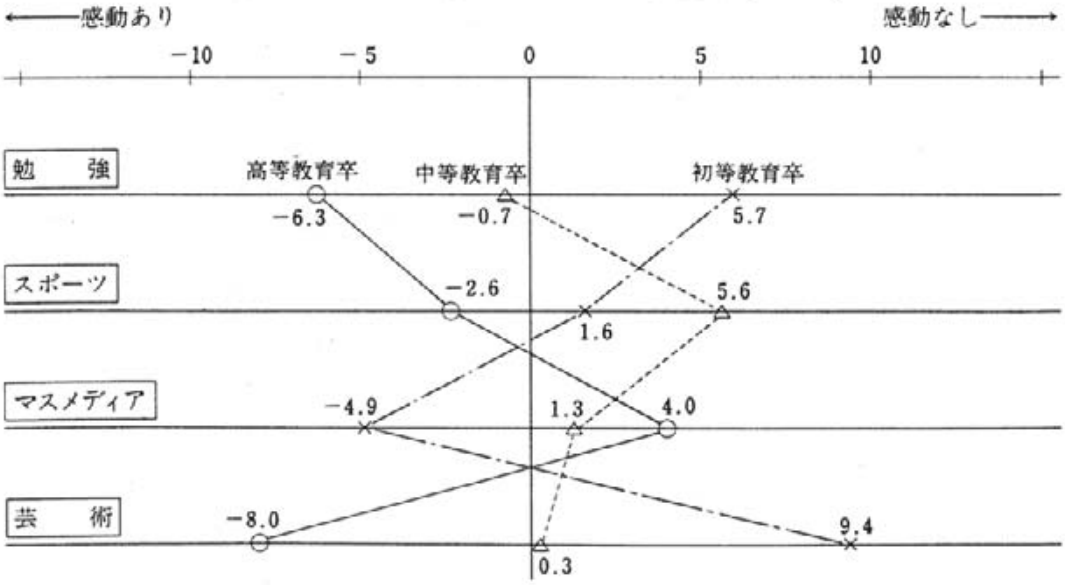
まず性別でみると、男子は「勉強」と「芸術」で感動し、女子は「マスメディア」でより多く

表６－４　感動の因子スコア・進路希望別（×10^{-2}）

（マイナス方向：感動あり）

	因子の名称	第１因子 勉　強	第２因子 スポーツ	第３因子 マスメディア	第４因子 芸　術
進路希望別	就　職	17.4	−8.6	−12.1	15.2
	各種・専修	16.7	0.4	−17.9	3.3
	短　大	0.5	5.3	−15.9	7.7
	4年制大（私立）	−1.8	−6.2	8.6	−7.6
	4年制大（国公立）	−12.4	1.2	12.4	−4.2

図６－３　感動の因子スコア・父親学歴別（×10^{-2}）



感動していることがわかる。男子の方が優等生的であり、女子はテレビ、マンガ、音楽といった校外にある多様なメディアと接触し、それらをエンジョイしている。

学年別にみると、1年生は「勉強」と「芸術」、3年生は「スポーツ」、2年生は特に目立った特徴はない。1年生では上からの教育やしつけに従順であり、3年生になるとヨコとの連帯が強まるのである。

クラブ・部活動別にみると、はっきりした差異がある。運動部の生徒は「スポーツ」で感動するばかりでなく、「勉強」でも感動体験があり、おとなに従順なよい子ぶりを発揮している。文化部の生徒は、さすがに絵やクラシック音楽といった「芸術」分野での感動がぬきんでており、「勉強」や「マスメディア」による感動も多く、多彩な活動ぶりがうかがわれる。部活動に参加したことのない生徒は、「スポーツ」のみならず、「勉強」においても感動体験が極端に少ない。部活動はその部の活動自体だけでなく、友人関係や教師との関係をとおして、生徒の学校への適応度を高める働きをしているのである。

生徒の学業成績別に、感動体験の質の違いをみたのが図6－2である。学校格差も考慮して、Aグループ校の成績上位者と、Bグループ校の中位者、Cグループ校の下位者を比較した。その結果、成績上位者は「勉強」と「芸術」、中位者は「スポーツ」、下位者は「マスメディア」という差がはっきり出ている。ここでも成績下位者が、校内の価値ではなく、校外のマスメディアにのみ感動の源泉を求めていることが、はっきり表れている。成績の違いが感動体験の質の差を生み出す場合と、感動体験の差が成績の差を生み出す場合があるが、おそらくその両方の規定関係が働いているのであろう。

次に将来への進路との関係で、感動体験の質の違いをみてみよう。表6－4は、高校卒業後の進路希望別にみたものである。4年制大学希望者は、「勉強」と「芸術」に感動し、さらに私立大進学希望者は「スポーツ」による感動体験も多い。就職、各種・専修学校希望者は「勉強」「芸術」による感動は少なく、もっぱら「マスメディア」という校外での感動体験に終始していることがわかる。

家族的背景も、高校生の感動体験の質に違いを生じさせていることに注目しておこう。父親の学歴別にみると、高等教育卒の父親の子は「勉強」と「芸術」価値による感動体験が多く、中等教育卒の父親の子は、「スポーツ」が多く、初等教育卒は「マスメディア」による感動体験が多いという違いが生じている（図6－3）。

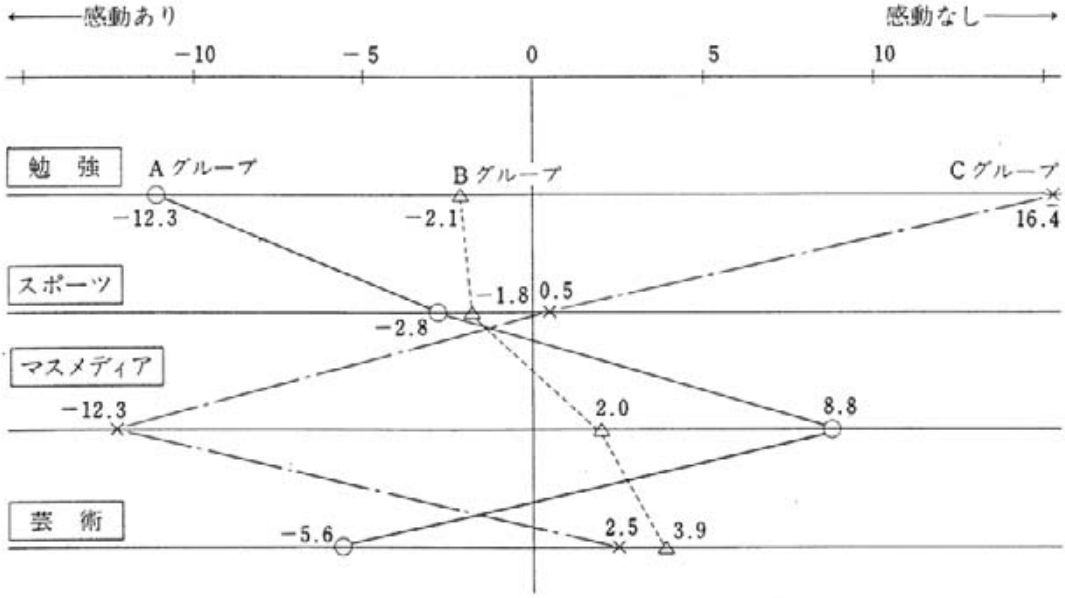
4. 感動と学校文化

Aグループ校の生徒はアカデミックな学校文化の影響を受け、Cグループ校の生徒は、学校外のマスメディアに感動の機会を求める傾向がある

次に学校文化の影響はどうであろうか。図6－4は、学校グループによって高校生の感動の質がどのように違ってくるかをみたものである。「勉強」と「芸術」で感動するのはAグループ校の生徒、「マスメディア」で感動するのはCグループ校の生徒である。「スポーツ」は学校グループ差のないことがわかる。

Aグループの学校の生徒は、アカデミックな学校文化の影響を受けて、先生の話や授業

図6－4　感動の因子スコア・学校グループ別（×10⁻²）



内容、芸術といった昔から受け継がれてきた伝統的価値に素直に接し、感動を受けることが多い。

それに対し、Cグループ校の生徒は、図6－5にみるように、学校生活への適応度がきわめて低く、学校で感動体験を得る機会が少ないことから、校外にそれを求めて、氾濫するマスメディア（テレビ、映画、マンガ、歌謡曲）に自分の心の停泊点を求めているのである。マスメディアによる感動体験の問題点は、それが消極的、受身的でone wayコミュニケーションで、感動を共有し、他者に働きかける側面が少ないことである。

Bグループ校の生徒は、Aグループ校とCグループ校の生徒の中間に位置する。

このように、学校の文化的風土は生徒の感動体験の質に与える影響力はきわめて大きい。しかし、その背後に家族的背景が働いていることも考えられる。(1)家族→学校グループ、(2)家族→感動体験という規定関係があって、(3)学校グループ→感動体験という規定関係はみかけ上だけかもしれない。その点を確かめるために、「家族的背景」(父親の学歴)と「学校グループ」と「感動体験の質」の三重クロスをみたのが図6－6である。この図からわかることは、「勉強」「スポーツ」「マスメディア」という3つの感動体験に関しては、家族的背景(父親の学歴)より学校グループ差の方が、影響力は大きいということである。学校文化の影響ははっきり存在するのである。

具体的にみてみよう。たとえば「勉強」に関してみると、初等教育卒の父親の子どもでも、進学率の高いAグループの学校に入れば、高等教育卒の父親の子どもでB、Cグループの学校にいった者より、「勉強」に関する感動体験を多くもつようになる。このように高校段階ともなると、こと勉強に関しては、家族より学校の影響が大きいのである。次に「マスメディア」に関してみると、父親の学歴にかかわりなく、Cグループ校へいけば、友人たちとの話題の影響もあって、「マスメディア」(テレビ、マンガ、歌謡曲)に多く接し、その影響を多く受けるようになる。Aグループ校にいくと、「マスメディア」による感動体験は少なくなるのである。スポーツに関しては、高等教育卒の父親をもつCグループ校にいった生徒が、スポーツに一番打ち込むという傾向が表われている。

以上のような3つの感動と違う傾向を示すのが、「芸術(絵画、クラシック音楽)」に関す

図6－5　学校適応度（学校グループ別）

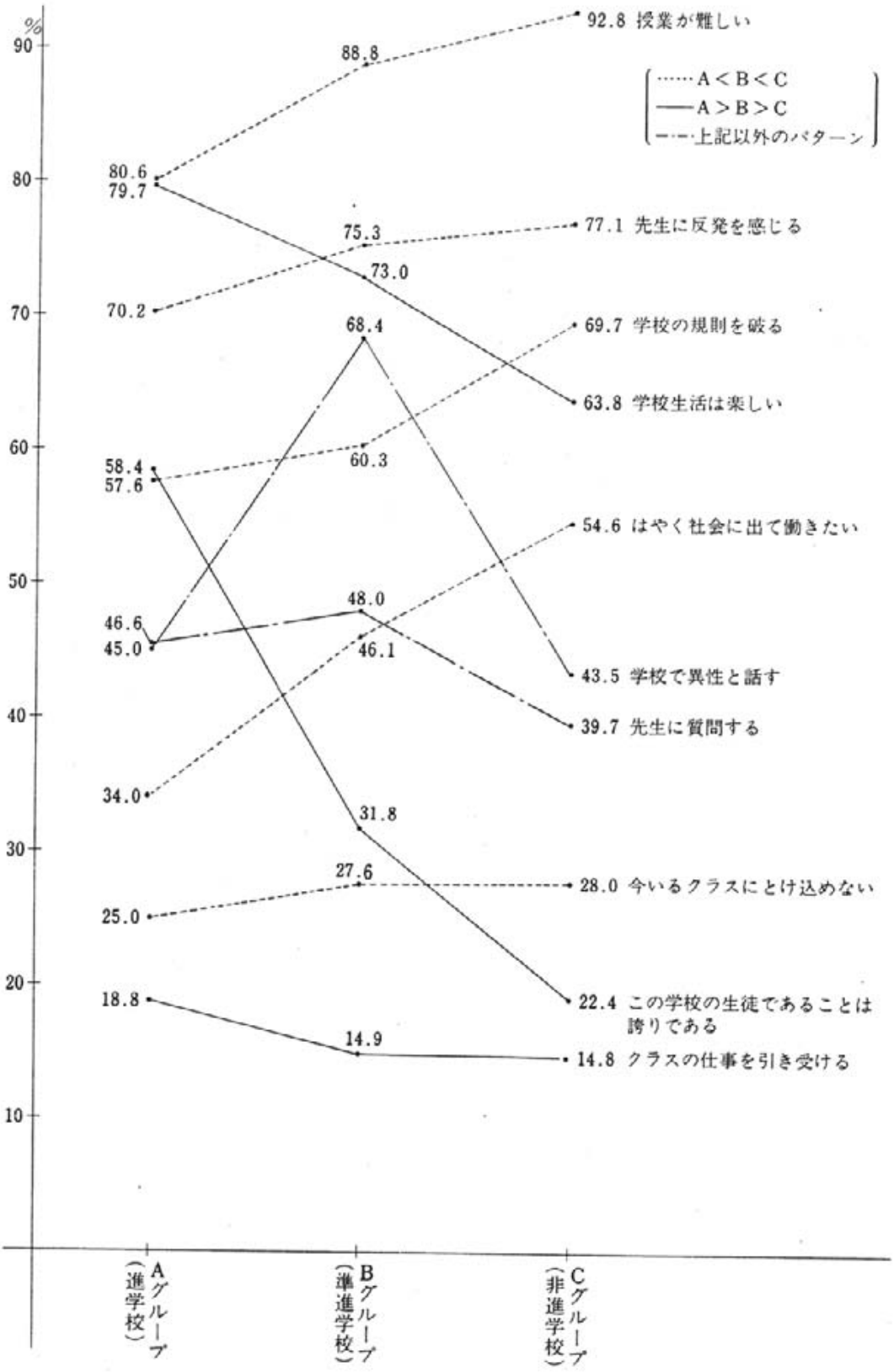
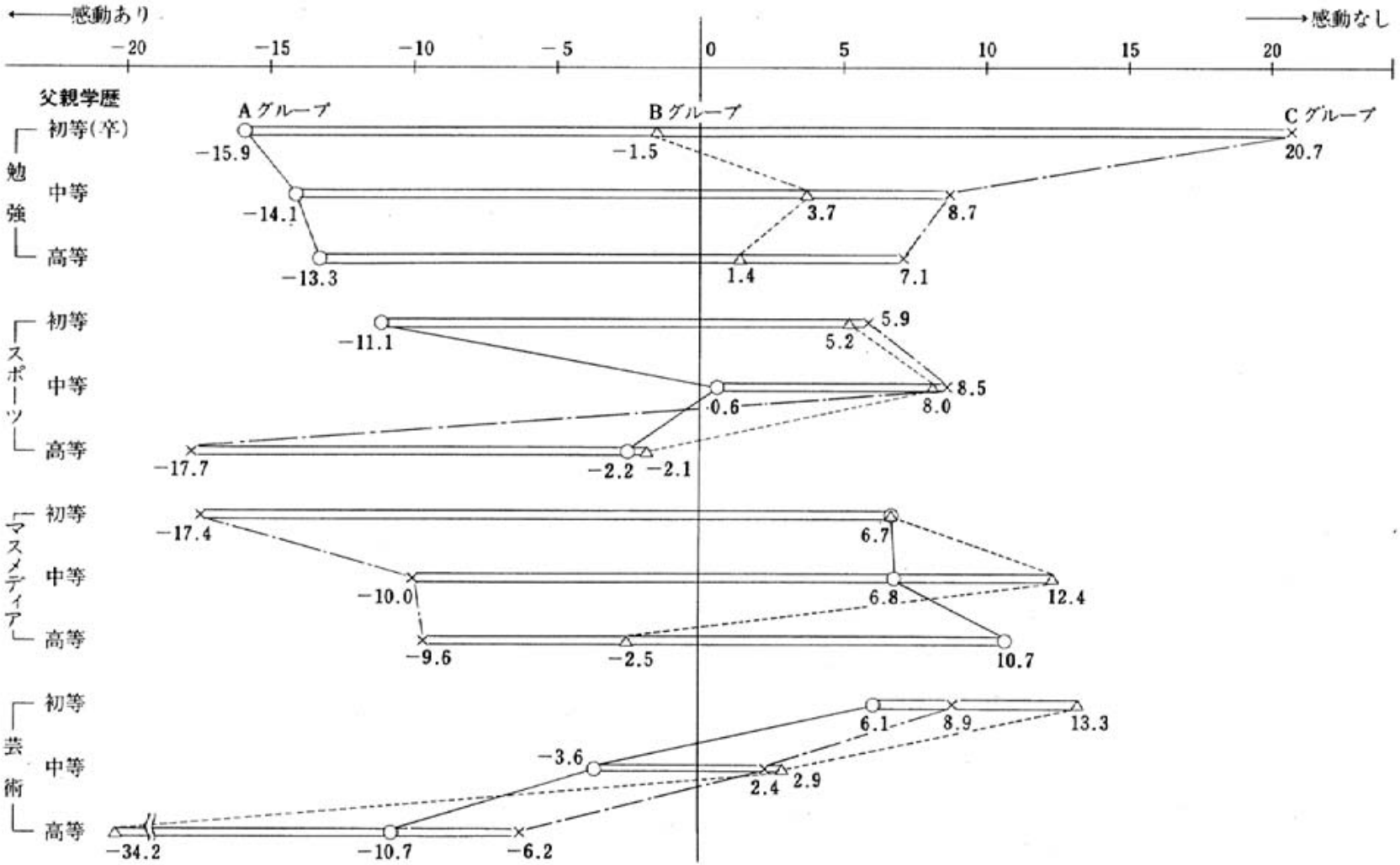
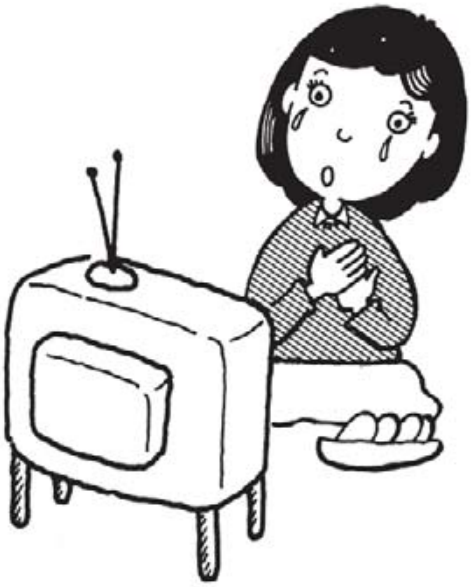


図6—6　感動の因子スコア・父親学歴×学校グループ別（×10⁻²）



る感動である。この感動に関しては、学校グループ差より、親の学歴差が大きく働いていることがわかる。どの学校にいくかにかかわりなく、親が高等教育卒の場合、芸術に関する感受性が強く養われるのである。芸術への感動は、小さい頃からの家族の文化環境が大事なこと、そして現在の学校教育が芸術教育への配慮を欠いていることを、この数字は示している。したがって、「芸術」分野は例外であるが、一般に高校生がどのような感動体験



をもつようになるかは、家族の影響より学校の影響の方が大きいといってよいであろう。学校における友人関係、教師の発言、部活動、学校の雰囲気等に影響されて、学校内のみならず学校外でも、どのような感動に出会いやすいかが決定されるのである。

高校生の感動をめぐる本章の考察をまとめると以下のようになる。

(1)物事の見方や考え方が変わるような感動を経験したことのある高校生はとても多い。1人平均7つの分野の感動経験をもっている。平均すると、それぞれの分野で約半数の生徒が感動していることになる。

(2)現代の高校生の感動体験のベスト3は、1位テレビ・映画、2位友人とのつきあい、3位小説や詩を読んでである。クラシック音楽や絵画をとおしての感動は少ない。

(3)性別でみると、男子より女子の方が感動体験が多く、その分野もテレビ、マンガ、友人、異性とのつきあいと多彩で、学校外にひろがっている。

(4)大学進学率の高い、Aグループ校の生徒は、「勉強」と「芸術」の分野での感動体験が多く、進学率の低い、Cグループ校の生徒は、校外のマスメディアによる感動体験が多くなっている。家族的背景や成績（今回はデータを省略）考慮しても、この学校格差文化の影響は消えない。

(5)学校外の「マスメディア」との接触による感動体験は、成績下位者、非進学者、Cグループ校の生徒に多いが、彼らは傷つけられた自我の回復の場を「マスメディア」に求めており、多少逃避的で受身的な感動体験であっても、それらとの接触を通して、社会性の発達や人格の形成がはかられている。

(6)学校の内外で高校生に感動を与える機会をつくっていくことが大切といえよう。